慈濟

ものがたり

ツーチー　2020年9月　285

●表見返し　文・證厳法師　訳・済運　撮影・蕭耀華

妙法で以て善行する

心を込めて諸善行を慎重に行う。
怠けず精進し、成すべき事を妙法で以て行う。
理に沿い、初心を忘れるべからず、
心を浄化し、正念を保つ。
慈悲で済世し、静思する。
これは全て仏教の善法である。

目次

慈済日本サイト

【編集者の言葉】
愛は障害を取り除いてくれる　慈願／訳　4

【主題報道】
共に大愛で以て福を造り善行する　善耕／訳　8
慈濟のメッセージを国連の「リリーフウェブ」に　御山凛／訳　24
台湾弱者世帯へ
適時のケアは続いている　惟明／訳　28
就学支援　一人も欠けることなく　葉美娥／訳　39

【特別報道】
愛の中継地
広州感染予防物資調達チームの昼と夜　有田夏子／訳　46

門外漢の調達奮闘記　有田夏子／訳　57

【證厳法師のお諭し】
天理に順じて衆生を護りましょう　慈願／訳　66

【人物誌】
家路につく　メキシコの野村賢　惟明／訳　72

【大地の守護者・春節の休み】
毎年廟に来て福をもたらす　善耕／訳　84

【聞・思・修】
わだかまりから一歩先に踏み出す　葉美娥／訳　94

【行脚の軌跡】
歩く時は軽く　地を痛めないように　済運／訳　102

八月の出来事　済運／訳　107

表紙

新型コロナウイルスの感染拡大につれ、封鎖政策が貧困者たちの生活に影響を及ぼし、各国の慈済ボランティアは現地で慈善支援活動を展開した。５月から６月にかけてミャンマーの慈済ボランティアは２万世帯に配付を行った。トングワ町の住民は３袋の米を受け取って笑顔を見せた。手に抱えている貯米箱は「一日一握りの米で人助け」することを呼びかけている。（撮影・ナイ・トゥラ）

愛は障害を取り除いてくれる

◎訳・慈願

六月七日から、政府は次々と新型コロナウイルスの感染予防策を緩和した。国民は一息つき、公共の場では人々が集まり、活気が戻りつつある。しかし一部の国では感染症が依然として深刻な状態で、秋冬には第二波が警戒されており、全国民は長期の防護措置を疎かにしてはいけない。

中南米諸国や非常事態宣言をすでに解除したが、再び感染が拡大した国々に比べ、台湾は相対的に安全だと言えるが、人ごとでは済まされない。経済の殆どを対外貿易に依存している台湾は、海外で感染症が鎮まらない限り、感染者が入国する機会が増え、台湾の防疫作業は再び挑戦を受けることになる。

重大災害は往々にして貧富の差を広げる。各国の失業者は最高レベルを記録し、欧米諸国も例外ではなく、各国政府は不本意ながらも様々な救済策を出さなければならなくなっている。それによって巨額の財政赤字に陥り、その債務は次世代に引き継がれることになり、次世代はさらに貧困に陥ってしまう。

ほかにも各国の中央銀行が失業率を抑えるために、量的金融緩和政策を実施して通貨の供給量を増やすことで貸付け量を多くしようとしているが、逆に富裕層が投資利益を拡大するチャンスを作ってしまう。貧富という「不平等」な現象は益々顕著化し、社会は容易にポピュリズム言論の出現によって調和を失うことになる。

過去の経済学者の予測では、経済低迷は往々にして十年ほど経たないと

平静な状態には戻らないそうだ。感染症の終息がいつになるのか未だ知る余地はないが、その蔓延は必然的に全世界の経済を大きく揺さぶっている。私たちも生活態度と様式を改め、共同体が困難にある時、如何にして困窮者に支援の手を差し伸べることができるかを考えてみるべきである。

台湾で政府による一回目の救済を受けた社会的弱者は九十一万人で、四月の統計では失業者が四十八万人に達した。全台湾の五分の一の労働者が、メディアの報道する「コロナ貧困者」になる可能性がある。

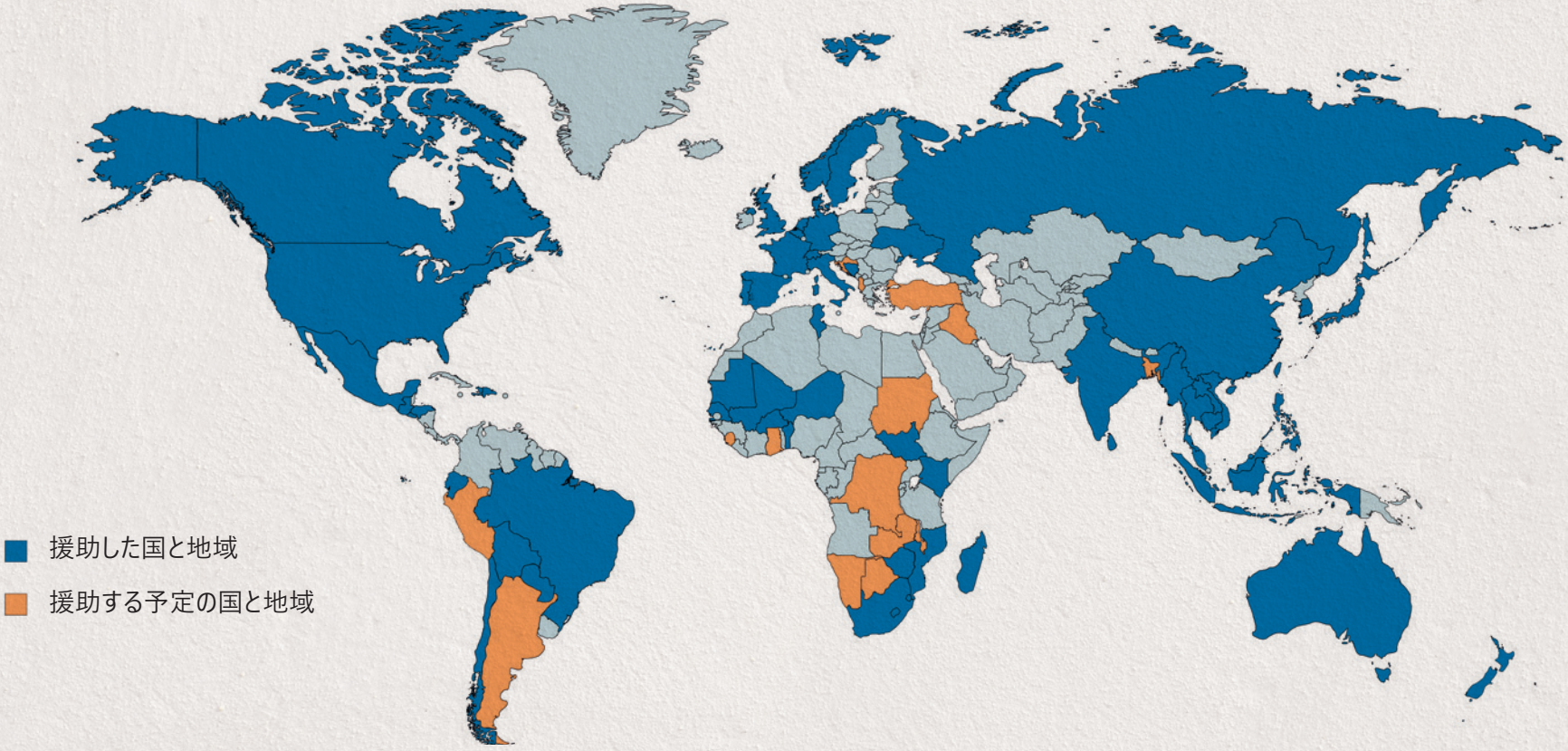
今期の主題報道によると、慈済ボランティアは四月中旬から、現在継続中のケア世帯の他、二年前に支援を終えたケア世帯も合わせて五万三千世帯を訪問し、実質的なケアの査定を行った。台中、彰化及び南投のボランティアは、県立と市立の八百十八の学校を訪れ、生活困窮家庭の子供が安心して就学できるよう支援している。

世界でも多くの国の慈済人が、現地で感染予防物資を支援し、中国から物資を調達している。広州、蘇州の慈済人は三月に感染予防物資調達チームを設立した。原材料不足による物価の高騰、感染予防物資の輸出に必要な各種証明書の取得、そして航空便の減少によっていっぱいになった物流倉庫など様々な状況の変化に対応して、ボランティアたちが明け方まで働いて物資を他国にいる慈済ボランティアに送るという状況は珍しくない。

私たちはこの経験から、愛は感染症によって引き起こされた混乱と障害を取り除くことができることを深く体得した。これは自ら修復すべき一大法門でもある。（慈済月刊六四四期より）

共に大愛で以て　福を造り、善行する

新型コロナウイルス感染症対策を支援し
慈済は世界のどこにでも駆けつける



文・葉子豪　訳・善耕

世界各国が新型コロナウイルス感染症（COVID−19）と闘って半年が過ぎた。人類に全く別の新しい生活様式が定着しつつある。国際的慈善団体である慈済も、今までとは違う支援形態に挑んでいる。

国内外のボランティアは感染予防対策を守って外出を控え、花蓮本部とオンラインでコミュニケーションをとって、支援方向の認識を共有している。自宅待機という感染防止策の制限下ではできることに限りはあるが、苦難に喘ぐ人を慰める慈悲心は冷めていない。感染状況が比較的安定している台湾では、マスクが最も不足していた時、ボランティアは二十万枚余りの布マスクを縫製した。経験豊かな訪問ボランティアは自宅待機をしている人に電話訪問をして見舞い、元気づけた。調理ボランティアは命を守る医者と看護師、警察官、消防士らを元気づけるために温かい菜食弁当を届けた。感染状況が緩和してから、多くのボランティアが街に出て、感染症のために苦難に陥っていた困窮者を探した。

海外の慈済ボランティアは少ない人員とリソース、そして何千何百倍も深刻な感染状況に直面しているが、彼らは尻込みすることなく、台湾の本部と密接に連携して貴重な防疫物資を世界各地に届けている。それらは世界中の医療人員の安全を確保してウイルスと戦う力をつけると同時に、食糧やお見舞い金、公共衛生の知識などと合わせて生活困窮者や難民に届けられた。この愛の行動はまだ続いている。愛のエネルギーを一滴一滴と結集していく。（慈済月刊六四四期より）

アジア、オセアニア

マレーシア・クラン

◎行動制限令が繰り返し延長された。多くの外国人出稼ぎ労働者は無給休暇を強いられたり、工場の操業停止に遭い、食糧難に陥った。慈済マレーシアのセランゴール支部は、設置されたホットラインを通じて情報提供者に必要な支援を手配した。密集せず、１メートル以上の間隔を取る規則を守りながら、外国人出稼ぎ労働者は祝福カードとパスポートを持ち、買い物券を受け取った証明にボランティアが写真を撮った。（撮影・許詒玲）（写真上）

◎慈済インドネシア支部はインドネシア商工会館と共同で募金を集めて、１００万セットの新型コロナウイルス検出試薬キットを政府及び医療機関に寄付した。支部副執行長の郭再源（グオ・ザイユエン）氏によると、３月に購入した時は価格が非常に高騰していたが、感染防止は時間との競争なので、安くなってから購入していては人を救うことができないと考え、即座に購入の決断を下した。（撮影・アリマミスリョ・アスマロ）（写真右上）

◎くず拾いや左官、手押し車の露天商など貧困者証明を持っているコックロカ地区プレックプナヴ県の８００世帯余りの住民は、６月１０日に慈済から米と油と塩の配付を受けたことで、少なくとも１カ月間、生活の心配がなくなった。感染症発生後、収入は減少したが、世界中からの愛に助けられた住民は、自分も愛のある１人でありたいと願って、日本円にして４円から８円を惜しみなく寄付した。（写真提供・カンボジア支部）（写真右下）

インドネシア・ジャカルタ

カンボジア・プノンペン

北米・中南米

アメリカ・ニューヨーク

◎アメリカは世界で最も新型コロナウイルスの感染者が多く、中でもニューヨーク州が最も深刻で、38万人余りの感染が確認された。ニューヨークの慈済支部は、3月に爆発的感染拡大が起こるとニューヨーク市の主な病院に感染防護具を届け、4月からは療養所やリハビリセンターにも届けた。ロングアイランドの慈済ボランティアがアルツハイマーの治療を専門とするオイスターベイ介護センターに到着した時、看護スタッフは米語訛りの中国語で嗚咽しながらボランティアに「謝謝（ありがとう）」と言った。（撮影・ガルソン）

感染予防物資が送られた国と地域

1.カナダ
2.アメリカ
3.シント・マールテン
4.プエルトリコ
5.ドミニカ共和国
6.ハイチ
7.ホンジュラス
8.エルサルバドル
9.グアテマラ
10.メキシコ
11.ブラジル
12.パラグアイ
13.エクアドル
14.ボリビア
15.チリ

アジア、オセアニア

フィリピン・ザンボアンガ市

◎ミンダナオ島南部のサンボアンガは、長い間内戦が続いて人々の生活が困窮している上に、新型コロナウイルスの爆発的な感染が起きた。慈済ボランティアは５０カ所以上の病院に医療用マスク、体温計などの物資を支援すると共に、イスラム教徒の学生ボランティアの協力を得て、離島の住民に米を運んだ。６月初めまでに慈済はフィリピン全土で１０万世帯余りを支援した。（写真提供・楊偉順）

感染予防物資が送られた国と地域

1.韓国
2.日本
3.台湾
4.香港
5.フィリピン
6.ブルネイ
7.インドネシア
8.アメリカ領サモア
9.ニュージーランド
10.オーストラリア
11.中国
12.ベトナム
13.ラオス
14.カンボジア
15.タイ
16.マレーシア
17.シンガポール
18.ミャンマー
19.ネパール
20.インド
21.スリランカ
22.ヨルダン

北米・中南米

チリ・サンティアゴ

◎深刻な感染症の影響で職を失った多くの貧困者は一層貧しくなり、食料不足に苦しんでいる。コンチャリ市では８割の住民が貧困世帯だが、コミュニティにあるリカンアンタイ小学校の教師たちは慈済ボランティアと一緒に「コミュニティのホットポット」活動を催し、各地から寄付された食料を集めて調理すると、困難を乗り越えられるよう貧困世帯に送り届けた。（写真提供・チリ・サンティアゴ支部）（写真上）

◎ブラジルは世界で新型コロナウイルスの感染が２番目に深刻な地域で、６月１８日現在で感染者は９５万人余りとなった。慈済は最前線医療スタッフを保護するために、マスクや防護服、ゴーグル、手袋などの医療物資を７つの病院に寄贈した。そのうちの一つであるサンタカーサ病院は創立４００年余りで、５つの分院を持ち、ブラジル以外に他の南米諸国へも医療サービスを提供している。外来患者は１日当たりのべ１万人余りに上る。（撮影・李金満）（写真右上）

◎ノースヨーク総合病院は通常９台の酸素吸入器を備えていたが、感染症が拡大すると各種の医療を拡充するのに１３０台の酸素吸入器が必要になったため、慈済ボランティアが資金を募った。病院側は、その機械は品質が非常に良く、今後１０年以上、呼吸疾患の患者を助けることができると述べた。（撮影・朱啓誠）（写真右下）

ブラジル・サンパウロ

カナダ・トロント

アフリカ

モザンビーク・マプト

◎長期的に医療スタッフと設備が不足しており、感染症に対抗することは難しい。それでも、慈済ボランティアは公衆衛生教育を指導し、ビデオを作製して感染予防に対する正しい観念を教え、政府と協力して地域社会に入って人々に正しい手洗いの方法を指導した。感染予防物資が到着した後、ボランティアは１２の病院と２つの検査センターに寄贈した。（写真提供・蔡岱霖）（写真上）

◎タボ・モフサンヤン村は南アフリカの中央山脈に位置する非常に貧しい村である。当村は行政区が接する場所に位置しているため、どこも面倒を見ず、防疫のために全国的に封鎖された後、村民は深刻な食糧不足に陥った。慈済ボランティアは２００kmの道のりを馬に乗った村人に導かれて進み、村の６０世帯に食料パックを届けることができた。（撮影・黄秋月）（写真右上）

◎感染症が拡大する間に干ばつが起きて、殆どの井戸が干上がってしまい、住民は汚れた水を繰り返し使うしかなく、公衆衛生面で心配された。ボランティアは、首都ハラレから３０km以上離れた農村部のドンボシャバで村民を指導して井戸を掘削した。やっと掘削が終わり、村民の目の前でボランティアの代表がポンプを何回か押すと、終にきれいな水が出てきた。（撮影・Hlengisile Jiyane）（写真右下）

南アフリカ・レディスミス

ジンバブエ

ヨーロッパ

フランス

◎３月中旬に隔離政策が実施されたが、５月中旬に都市封鎖が解除された。６月中旬過ぎまでに確定された感染者総数は１９万人に上った。その期間中、マスクのない留学生を安全に帰国させるために、ボランティアは外出が許可された短時間を利用してマスクを郵送した。海外からの支援物資が次々に届き、シャンテルーアンブリエ市、ロモランタン市、中部のソローニュ地方に送付された。南西部のバスク地方は、政府が最前線の医療スタッフにマスクと感染予防物資を提供できなかった場所である。バスク病院は慈済から物資を受け取ると、コミュニティサイトで慈済の大愛を紹介した。

感染予防物資が送られた国と地域

1.ロシア
2.ウクライナ
3.スウェーデン
4.ノルウェー
5.イギリス
6.デンマーク
7.オランダ
8.ドイツ
9.ベルギー
10.オーストリア
11.ボスニア
12.バチカン市国
13.イタリア
14.スイス
15.フランス
16.スペイン
17.ポルトガル

アフリカ

南アフリカ・ヨハネスブルグ

◎３月に感染症が拡大すると直ぐに全国で都市封鎖が実施され、最も厳しいカテゴリー５の規制が導入されたが、アフリカで最も感染者数の多い国になった。慈済が海外で調達した1回目の感染予防物資は５月中旬に到着し、ボランティアが各病院に寄贈した。普段から食料不足に悩んでいる貧困者は、都市封鎖のために更に飢えに苦しむようになったため、テンビサ地域の現地ボランティアが住民に食料パックを届けた。（写真・南アフリカ支部）

感染予防物資が送られた国と地域

1.チュニジア
2.南スーダン
3.ケニア
4.マダガスカル
5.モザンビーク
6.ジンバブエ
7.エスワティニ王国
8.レソト王国
9.南アフリカ共和国
10.マリ
11.セネガル
12.ブルキナファソ
13.ベナン
14.ニジェール
15.モーリタニア

ヨーロッパ

ドイツ

◎４月に８万枚のマスクが様々な難関を突破してドイツのフランクフルト国際空港に到着した。ボランティアはマスクを受け取ると直ぐに、感染症が最も深刻なノルトライン・ヴェストファーレン州の当国で感染が始まった地域でもあるハインスベルグ郡に急いだ。トラックの到着と共に、ボランティアは郡の消防局が設置した臨時物資受け取りセンターに２万枚のマスクを搬送した。それらは郡内の３つの病院に寄贈された。（写真提供・林美鳳）（写真上）

◎感染は２月末に拡大し、４月上旬にピークに達した。慈済花蓮本部が支援した感染予防物資は４月２１日から次々に到着した。慈済ボランティアは２０万枚のマスクとガウンをロンドン、ケンブリッジ、オックスフォード、マンチェスター、エディンバラ、バーミンガム、マルバーンなどの都市にある関係機関に寄贈した。ロンドンのホーマートン大学病院の医療スタッフは、同僚が一人ひとりと倒れていくのを目にしても何もできなかったため、慈済が高品質の感染予防物資をこんなに多く提供してくれたことに深く感謝した。（写真提供・呂佳樺）（写真右上）

◎２月に中国で感染拡大が深刻になった時、慈済ボランティアは関係者を通してロシアの友人に６千枚のマスクの購入を依頼し、自らモスクワから北京に持ち帰った。北京のボランティアが早朝、雪道を急いで北京首都国際空港に駆けつけた。その後、ロシアで感染が急拡大した。６月の時点で感染者数が５０万人を突破すると、慈済はその時感染予防物資の支援をしている。（撮影・王雲岫）（写真右下）

イギリス

ロシア

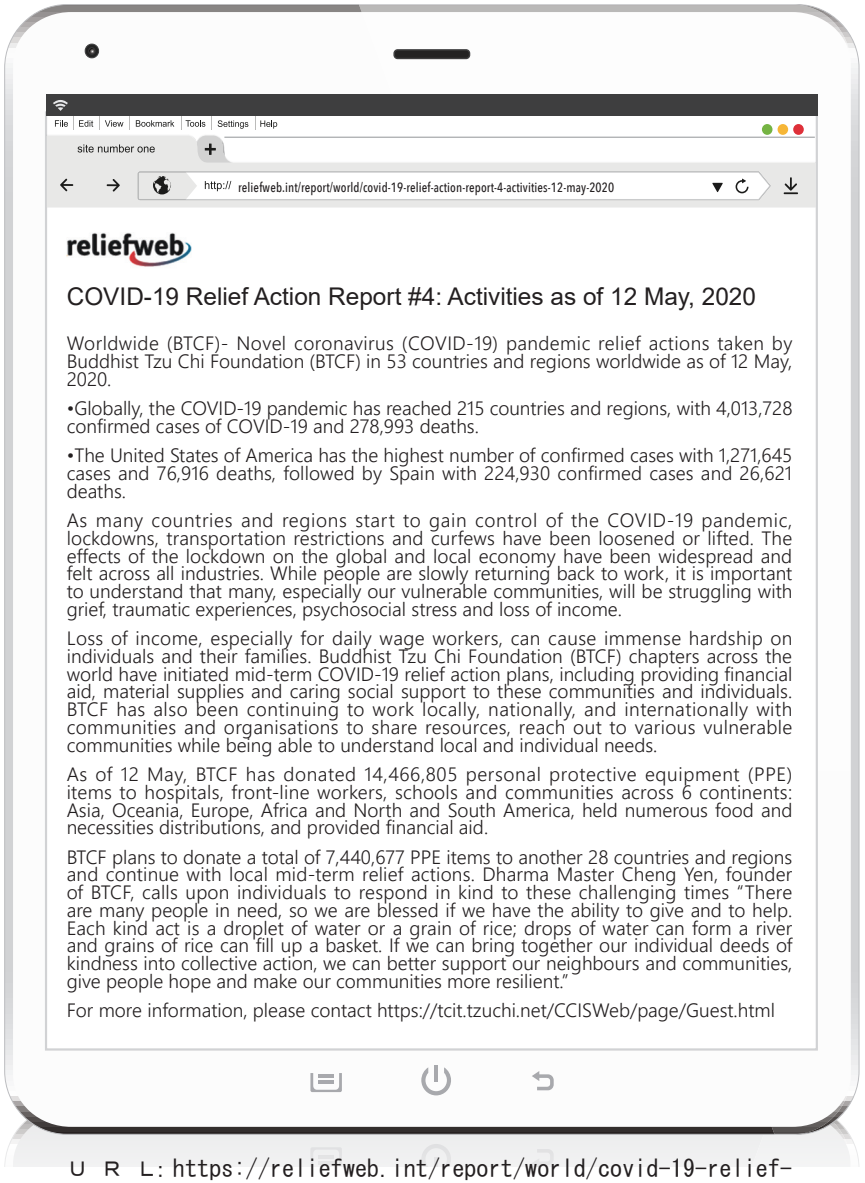
国連の「リリーフウェブ」に

文・葉子豪　訳・御山凛

モバイル端末が普及し、メディアが発達した二十一世紀、個人や団体組織は容易にネット上で自分のサイトを作り、伝えたいメッセージを素早く発信することができるようになりました。情報が氾濫する中で、価値のあるものを選び分ける時、その専門性と信憑性は依然として重視されています。

国連人道問題調整事務所（ＯＣＨＡ）が一九九六年に立ち上げたリリーフウェブは、国際人道支援の内容をまとめた重要なサイトの一つです。今まで累計で二千九百余りの支援団体がこのサイトで自分たちの活動の写真や内容を載せてい

●仏教慈済基金会（Buddhist Tzu Chi Foundation 略称ＢＴＣＦ）が世界各国で実施している感染防止に関する活動情報は、国連のリリーフウェブに掲載されています。下記のＵＲＬにある２０２０年５月１２日の慈済の支援内容は、新型コロナウイルス感染症対策支援の第４回目の報告です。



ＵＲＬ: https://reliefweb.int/report/world/covid-19-relief-action-report-4-activities-12-may-2020

ます。各国の公共部門または非政府組織（NGO）の間では、非常に重要な情報源となっています。

人道支援の方策決定者や実行責任者、ボランティアなどは活動方針を決める前に、先ずリリーフウェブで情報を収集して、支援を受けている地域や人々のニーズを理解し、他の団体が既にどのようなことをしているのかなどを知ることができます。また自分たちの活動の進度や成果を載せて参考にしてもらったり、同じ志を持つ仲間と交流することができます。

国際的な繋がりと情報交換の重要性を理解している慈済は、全世界の人に慈済の国際支援活動を知ってもらうために、二〇〇二年六月からその活動の様子をリリーフウェブに載せるようになりました。慈済基金会傘下の「国連担当チーム」は、今年からサイトに載せる図や文章を、よりリリーフウェブの表示形式や国際的な慣例に見合うように新しく作り直しました。例えば、各国への感染予防支援状況を示す場合、既に支援した国を青色で示し、支援待ちの国をオレンジ色で示すことで、より分かりやすく伝えています。

文字による情報提供では、国際的慣例に沿って、五大大陸からの情報を色別に枠で囲み、読み手がどの地域で何が起きているのか素早く判別できるようにしています。

今回、八十カ国余りに対する慈済の感染予防関係の支援計画では、マレーシア、シンガポール、タイ、アメリカ、ブラジル、ニュージーランド、オーストラリア、南アフリカ、モザンビーク、イギリス、フランス等十一カ国の支援内容を五大大陸を五色に色分けして「大愛に国境はなく、世界に遍く行きわたる」様子をアップデートで見ることができます。

慈済国連担当チームの黄静恩（ホァン・ジンエン）さんは、「これから慈済の国境と宗教を越えた活動を広く知ってもらい、世界の仲間たちと互いにサポートし合えるようになることに期待しています」と言いました。チームメンバーが世界中の慈済の情報を英語に翻訳すると共に、国連で使われる語彙を織り交ぜながら、リリーフウェブに載せています。そしてこのような温かいメッセージがより影響力のあるものになるよう願っています。（慈済月刊六四四期より）

台湾弱者世帯へ

適時のケアは続いている

文・陳麗安　撮影・蕭耀華　訳・惟明

●慈済の訪問ケアボランティアは、ケア世帯或いは既にケアが終了した弱者家庭を訪ねることで、支援の必要性を了解している。ボランティアの林春金（右）は自分がケアするシングルマザーを励ました。

台湾全土の弱者世帯数は五万戸を超える。コロナ禍で慈済ボランティアが連絡すると旧知のように挨拶を交わし、家計への影響などを話し合った。電話や家庭訪問で寄り添い、経済的苦境に陥っている彼らに、直ちに支援の手を差し伸べている。

炎夏の中で突然降り出す豪雨。時は夏に入り、台湾のコロナウイルスの感染状況は落ち着きを見せている。数か月続いたコロナ禍の中で無事に過ごせた家庭もあれば、収入が激減したり仕事に響影が出て、生活に困難をきたしている家庭も少なくない。

新北市在住の顔さんは、元は行政の下請けをしていた。長期にわたる仕事のストレスから去年十二月に体を壊し、やむなく仕事をやめて自宅療養を強いられ

た。当時、兵役を終えたばかりの息子はイベント会社に就職したが、感染が拡大する中、集会が禁止になり、二月末から仕事が激減して給料は半減、三月に入るとさらに無給になった。五月初め、顔さんは家計を助ける為に、仕方なく病院内配送の仕事に就いた。少ない給料で生活費、水道・光熱費、そして家賃を賄った。家賃の一万五千元（約五万四千円）は既に親戚から借りていたが、彼女は預金残高を見て長くもたないことは分かっていた。そんな時に、新北市中和在住ボランティアの林さんから電話があった。この電話の縁で慈済（ツーチー）は、顔さん母子がこの難関を無事に乗り越えるようにと支援を再開した。

『その電話を受け取った時は、まるで大海で浮き沈みしている時に浮木を掴んだような感じでした』という顔さんの話を聞いた時、私は助けを必要とする家庭をまた一つ見逃さなかったことに喜びを感じました」と経験豊富な訪問ケアボランティアの林さんは当時のノートを取り出し、通話内容の記録を見ながら当時を振り返った。

コロナの影響による経済的打撃に対応する為、台湾の行政院は苦境に陥っている会社や家庭或いは個人、弱者世帯の子供、低収入世帯、そして心身障害者を助ける為に支援策を打ち出し、四月から六月の間、月額一千五百元（約五千四百円）の生活補助金を支給した。しかし、一部の弱者家庭は支給条件に適合せず、それを受け取る機会を逸した。

コロナウイルスの流行期間中、慈済ボランティアによる地域ケアは途絶えたことがなく、四月中旬から法師の指示に沿って、台湾全土で既に登録しているケア世帯及び二〇一八年に遡って今年四月までに生活が改善した五万もの「ケア終了」世帯に対しても、「大愛で以て寄り添い、福を造り善行する」と名付けた支援活動を始めた。取り残された家庭がないように、台湾全土のボランティアと社会福祉人員は電話訪問を行って査定した。

林さんは四月下旬に地域別に仕分けしたケア世帯の名簿を受け取った後、ボランティアの許淑雲（シュー・スーユン）さんと李玉華（リー・ユーホワ）さんに協力を依頼して、某日の午後に林さんの家に集合し、名簿にある五十数世帯に慰問の電話をかけた。

踏み込んだケア
ボランティアの心配

「法師様と慈済が私を忘れてなかった

ことに感謝します」と陳さんが言った。彼女はベトナム国籍のシングルマザーで、夫の薬物中毒と家庭内暴力に我慢できず、離婚し、独りで娘と生活している。林さんは名簿をもらうと直ぐに以前、コンタクトがあった陳さんに連絡した。林さんは電話訪問で、陳さんは市場で経営していたベトナム家庭料理の屋台をコロナ禍の影響で既に閉めていたが、不幸中の幸いで果物屋で働く機会を得たことを知った。陳さんが遠慮して困窮を話さないことを心配した林さんは、数日してから果物屋を訪れ、自分の目で陳さんの働きぶりを確かめてから胸を撫で下ろした。「彼女が私を見た時、私をきつく抱きしめました。そのことから彼女の心の中では、慈済がどれだけ大きな存在かを感じ取ることができました」。陳さん親子は生計の最も困難な時期を乗り越えており、彼女は林さんが電話訪問した中でも比較的安定しているケースだった。

各案件の家庭事情をよく理解していないため、林さんたち三人は先ず、過去の記録を探し出して各世帯の背景を理解し、今後のケアの方針を決めてから電話をかけるようにした。

「例えば仕事がうまくいかず生活が困窮しているという記録が残っていれば、私たちは仕事の状況に重点を置いて話を聞きます」。法師が苦難に陥っている人を気にかけておられると知って、林さんは喜んでこの使命を受けた。助けを必要としている家庭を見落とさないよう、昼間に連絡が取れない相手には夜に連絡を取り続けている。

以前からボランティアと交流がある相手は、「慈済ボランティア」からの電話だとわかると、その思いやりを嬉しく感じ、最近、心に鬱積していることをボランティアに話すこともある。「一番嬉しいのは多くの家庭の生活が向上しており、家族同士の仲がよくなっていることです」。「多くの家庭は以前、娘と父親の仲が悪かったのが、今は親子関係が改善して、家庭内に活力と希望が満ちていることを感じました」と林さんは喜びに満ちて言った。

コロナ禍の中でも、台湾は世界に誇れる「奇跡の感染予防」ができているが、地球規模の経済の中においては、レジャー、輸送、飲食などの業種で売上が落ち込み、パートの仕事が激減している。そのような様々な社会変化が一部の弱者家庭を困窮させている。顔さんのようなケースは少なくない。既にケアを終了した対象者

の中にもやっと均衡レベルに達した家計がコロナ禍がもたらした衝撃で再び困難に陥った人もいる。

労務省の統計によると、今年の六月中旬までに「無給休暇」を取らされた人は台湾全土で三万人近くに上り、この十年間で最高となり、大量解雇に踏み切った工場は四月末で五十六件になった。台湾は既に二カ月も国内感染ゼロの日が続いているとはいえ、経済成長が下降をたどる今、不安定な仕事、貯蓄不足、病気など異なる原因で緊急に現金を必要とする家庭は、再び「貧、病、苦」の悪循環に陥る恐れがある。

人生の危機 適時に支援の手を差し伸べる

「初日の電話訪問で驚きました。多くの家庭の事情を聞いて気持ちが重くなり、昼ご飯があまり喉を通りませんでした」。中部地区の経験豊富なボランティアの蔡雪桜(ツァイ・シュエイン)さんは、電話訪問を通して多くの弱者世帯が職場でのシフトを削減されたり、減俸になったり、又失業保険を受け取れない状況下で生活が切迫している話を聞いた。すべてがコロナ禍によるものではないが、電話訪問した中でケアを必要とする世帯が

三分の一を超えており、蔡さんは切なさを覚えた。一番印象に残ったのはひとり親家庭だった。

「生活があまりにも苦しかったので、私は下の息子と無理心中することを考えました」。シングルマザーの観さんは介護の仕事に従事しているが、小柄なために介護の対象が限られている上、コロナ禍で入院患者が減った為、収入に影響が出た。大学を卒業した長男は就職が上手くいかず、工業高校在学中の下の息子は二つのアルバイトを掛け持ちし、自分の学費と生活費を稼いで母親の負担を減らしていた。

しかし先日、アルバイトを終えた下の息子は、仕事帰りに疲労から不注意にも駐車していた車と接触事故を起こし、その賠償金を払う羽目になった。気落ちした観さんと下の息子は命を絶つ考えが頭をよぎった。まさにその時、蔡さんからの電話が、その家族に一筋の希望をもたらした。事情をよく理解した後、翌日にボランティアが訪ねてから、再び個別案件として寄り添うようになった。

コロナ禍の中で、多くのケア継続中またはケアは終了したが、収入源が変動し易いケースには、就学中の子供や病人がいるために生計が難しくなっている家庭

がある。貧困による病、病による貧困という悪循環がコロナ禍の衝撃で更にひどくなっている。慈済ボランティアはケア訪問する時、特に現状をよく聴いて判断しながら支援している。

「私の病気で家族が苦しんでいます。家族に迷惑をかけることが心配です」と口腔癌末期患者の呉さんは、何時病状が悪化するかわからない状態で、言葉が自由に話せず、筆談で自分の焦る気持ちを紙に書いた。短い言葉に切なさが伝わってきた。

呉さんは台中のボランティアである蔡さんの担当だったが、昨年ケースが終了した。今回の訪問で蔡さんが気づいたのは、呉さんが悩んでいるのは未払いの十万元（約三十六万円）の治療費が家計の重荷になることだった。息子は彼の

●感染症が少し緩和されてから、訪問ケアボランティアの林春金（右から１人目）は何人かのボランティアを家に集めて意見交換した。かつて慈済の支援を受けて会員になった人が近況を報告した。

定期検査に病院へ付き添っていくため、勤務時間を減らさなければならない。ショッピングモールの清掃員として働いている奥さんも仕事のシフトが安定していない。せめてもの足しにと大家さんが家賃を下げてくれたのだが、生活は依然として苦しい。蔡さんたちボランティアは呉さん一家の困難を緩和する為に一時金を支給することにした。

「呉さんの家に着くと、彼らは以前、置いて行った竹筒貯金箱を持って来ました。中にはお金が七、八分目まで入っていました」。この家庭は生活がどんなに苦しくても、自分よりも苦しい人を助けたいという善意を持ち続けており、格別に「貧しき中の富める者」という印象を受けた、と蔡さんが言った。経済的支援の他、慈済ボランティアは継続的に呉さんとその家族の心に寄り添って様々な支援を続けて行くつもりである。

長く寄り添い 自分も人助けする人になる

「ケア世帯の観念を正しく導けば、彼らの生活は自ずと好転します」。今回一連の活動を通して、林さんはかつての寄りそいや導きが多くの家庭に好影響をもたらしていることに喜びを感じている。

ボランティアの時を得たケアは、社会に忘れられがちな弱者世帯に温かみをもたらし、困窮にある多くの人々も己れが助けを要するにも関わらず、施しを惜しまずに自分よりも苦しい家庭を助けていることが分かった。近い将来に人々が懐かしい平凡な日常生活に戻れるよう期待している。

（慈済月刊六四四期より）

就学支援

一人も欠けることなく

文・柯佩吟　訳・葉美娥

八百校余りの学校に赴き、コロナ禍の影響を受けた学生の家庭を訪ね、経済面と物質面で支援すると共に心に寄り添うことで、子供たちが安心して就学できるようにしている。

中学校に通う宏君（仮名：ホン君）のお父さんはガソリンスタンドのパート従業員で、おばあちゃんは土産物の路上販売をしている。今年の二月以来、観光客が急減したことでおばあちゃんの売り上げも激減した。これまでの収入で一家は辛うじて暮らしていたが、今の生活はもっと厳しくなっている。

春節が明けると南投の古参ボランティア曾彩琴（ツン・ツァイチン）さんは他のボランティアたちと一緒に集集、竹山、鹿谷などを訪問した。二月に九二一希望工程（台湾中部大地震で倒壊した学校を再建したプロジェクト）で建てられた集集中学校を訪れた時、曾さんは直ぐに教務主任の陳恵娟（チェン・フェイジュエン）さんが自分の教え子だと分かった。二人は再会を喜び合い、安堵した。

「慈済は経済的な支援だけでなく、多方面から必要なことを支援してくれています」。陳主任は慈済の「安心就学」計画を知って、その成果を楽しみにしていた。申請登録チームから情報をもらい、各学級の先生たちの協力で案件を報告してもらった。宏君もその中の一人だった。

中部地区のボランティアは長期にわたって「安心就学」という企画を推進してきたが、コロナ禍による経済的影響を受けた家庭の子供の就学に影響がでないよう、今年、ボランティアは範囲を拡大して各学校に赴き、弱者世帯の子供たちがこの難関を越せるよう支援の手を差し伸べている。

過去の訪問ケアの経験で、ボランティアは特別に隔世養育、ひとり親、外国籍配偶者及び低中所得者層の家庭状況に注意を払っている。集集中学校の担任教師から報告があったもう一人の例である、烈君（仮名：リエ君）の場合は、父親と祖父母と同居していたが、半年前に父親がガンと診断され、定期的に病院で治療を受けるために働くことができなくなった。今は祖父母の年金で生活している。

「緊急支援金はまるで干ばつの大地に降った雨のようなものです。しかし、特殊な事情のある家庭にとっては、その支援の効果は限られています」と高君怡（ガオ・ジュンイー）先生が言った。宏君や烈君のような弱者世帯では経済的な困難は続くため、一回切りの緊急支援では根本から解決することは難しい。いつも子供の就学問題に関心を持っている高先生は、日頃から様々な就学支援制度の申請機会に留意している。「慈済ボランティアは直接家庭を訪れて適時に支援してくれます。子供たちにチャンスがまた一つ増えました」と彼女は感動して言った。

高君怡先生からの報告を受け取った後、慈済は直ぐにこれら学生の家庭を訪問した。そして烈君一家を長期ケア世帯

に登録し、毎月金銭的な支援をすることになった。しかし宏君の家族は「この困難はなんとか乗り越えます」とお礼を言って断った。曾さんは学校側とその家族に、将来もし生活に困ったり支援を必要とするようになった時は、いつでも遠慮なく報告してもらえれば、直ぐに駆けつけます、と言った。

多方面からの寄り添い、家庭に合わせたケアをする

二〇〇八年の世界金融危機の時、多くの企業や商店が不況の煽りを受け、世界各地からのオーダーが途絶えたことで、従業員に対して「無給休暇」を実施した

●慈済ボランティアは、台湾中部の８００校余りの学校に赴いて、コロナ禍の影響を受けた弱者世帯の子供たちを支援している。台中市の東興小学校でボランティアは「安心就学」計画には定員制限はなく、家庭訪問してから、学生の事情に合わせて支援を行うものであることを説明した。（撮影・劉淑媛）

ため、子供の学費が負担できなくなった。その翌年、慈済は「安心就学」という企画を推進し、各地域の慈済教師懇親会の先生と訪問ケアボランティアが積極的に各学校を訪問した。北部と中部地区だけで千校以上に足を運び、学校と協力して生活が困窮している家庭に実質的な必要に応じて支援した。

今回、新型コロナウイルスが猛威を振るっている時、「安心就学」計画は殊更に重要になっている。六月中旬までに台中、彰化、南投などの地域で、慈済ボランティアと社会福祉人員は計八百十八校の学校を訪れ、各学校からコロナ禍の影響で経済的な困難に陥った家庭、三百七十件の報告が寄せられた。ボランティアが観察したところ、多くの隔世養育家庭やひとり親の家庭は経済的に行き詰まっても、その大半が社会資源の協力をどう求めたらよいのかが分かっておらず、また親が仕事で忙しい為に、子供はケアと愛の導きを必要としていることにボランティアは気付いた。

曽さんに同行して竹山地域の学校を訪

問した慈済台中支部社会福祉人員の魏怡嫣（ウェイ・イーイェン）さんは、今回の「安心就学」計画の調査で、職業高校飲食学科一年生の念ちゃん（仮名：ニェン）のことが深く印象に残った。

毎回クラスで食材費用を集める時、念ちゃんだけ指定の日に払えないことが多かったため、学校側は慈済の「安心就学」計画を知ってから、それに申し込んだ。念ちゃんのお父さんは早くに亡くなり、中国籍のお母さんは介護の仕事をしているが、毎日朝早く出かけて夜遅くに帰り、一人で三人の子供を育てていた。ボランティアたちが訪問した時、お母さんはその好意を断った。毎回、学校の費用を規定の日に払えなくても、自分の力で子供たちを学校に行かせ、一家なんとか暮らしていく、とお母さんが言った。

ボランティアたちは、中学、高校、職業学校に通う三人の子供がベッドの上や床の上で勉強したり、本を読んでいるのを見て、勉強に適した環境に欠けていると判断し、この家に勉強机を贈ることを決めた。

五月三十一日、ボランティアたちは協力して三つの机を運び込んだ。「家の環境を整えてこそ、勉強はやる気が出るのよ」と三人の子供に言った。子供たちの笑顔を見て、暑い日で汗まみれだったボランティアたちは癒されたが、相変わらずのお節介な性格から一言、「頑張って」と子供たちに言った。

「安心就学計画は、ただ就学の支援をするだけではありません」と社会福祉人員の魏さんが強調した。慈済は更にこの企画を通じて学校側と手を携えると同時に、コミュニティに入って深く家庭と係り、子供や家庭が必要としていることに対して、経済的支援で生活物資を届けたり、心の面で寄り添うなど多方面で関心を寄せて、速やかに困窮から脱するよう協力しているのである。

大衆の愛を結集、子供を学校に通わせる

数百校を訪問して最終的にコロナ禍で影響を受けた子供を何人助けられるか分からないが、ボランティアたちは一人も余すことがないように、まだまだ歩き続けるつもりである。

南投の延平小学校を定年退職した、慈済教師懇親会の先生の曾さんは、以前、彼女が教鞭を取っていた時、既に一部の生徒は家庭が貧しい故に、就学が難しかったのを目にしていたため、特に子供が安心して就学できるようにすることに関心を持っていた。今年は防疫第一だが、曾さんはボランティアたちと共にもっと多くの学校を訪れ、弱者家庭の学生を訪問し、大衆の愛を結集することで子供たちを「学校に通わせ」、教育を通して人生が変わることを期待している。

（慈済月刊六四四期より）

特別報道

愛の中継地

広州感染予防物資調達チームの昼と夜

文・荘厳、祁海東　広州慈済ボランティア
訳・有田夏子

➡広州白雲国際空港にある貨物ターミナルでは、昼間は業務で繁忙なため、慈済の物資の受領と荷卸しは夜に行うしかなく、ボランティアたちは明け方まで作業を続けることも少なくない。（撮影・張翠貞）

広州の慈済ボランティアは感染予防物資調達チームを結成した。彼らは、業者の選定、サンプルの確認、契約締結、税関申告、国際物流の手配といった業務に尽力し、慈済の愛を六十カ国余りに送り届けて来た。

彼らはけっして目立たないけれども、新型コロナウイルスと最前線で戦っている医療現場の人々を、後方からしっかりとサポートしていた。

二〇二〇年一月下旬、春節を迎える喜びと希望に満ちた街の空気が、突如現れたウイルスによってかき消された。一月二十三日午前十時、武漢の街は、まるで一時停止ボタンを押されたかのように静まりかえった。この時から、新型コロナウイルスは人々の生活を大きくかき乱し始めた。

中国の至る所で道路や都市、そして農村が封鎖され、瞬時にしてマスクがもっとも重要な感染対策グッズとなった。各地の大病院では感染予防物資が不足し、慈済に次々と支援を求めてきた。二月六日、広州の慈済ボランティアは、感染予

防物資の中国国内積み替えチームを結成した。フィリピン、インドネシア、マレーシアなどの国々で調達され、寄贈されたマスクや隔離服、防護服、手袋などを受け取り、ボランティアたちの手を借りながら、空輸や宅配便などの方法で感染状況の最も深刻な武漢や、その他二十三省、百を超える県と市の、六百カ所超える病院や第一線の感染対策機関へ送り届けた。

三月に入り、中国における新型コロナウイルスの感染拡大はやや落ち着きを見せてきたが、今度は世界中で感染がじわじわと広がり始め、その勢いはやがて激しくなった。

物資の調達は共同作業

二月末には、広州ボランティアの唐惟良（タン・ウエイリャン）さんと張玲（チャン・リン）さんの夫婦が、慈済基金会のプロジェクトチームと協力しながら、感染予防物資を海外で調達する準備を始めていた。だが、感染の波が次々と押し寄せる中、海外物資に対する需要量は日増しに増えたので、現地でもチームの結成が不可欠となった。

三月十二日、広州のボランティアたちは、本部と協力して、「感染予防物資調達チーム」を結成した。中国蘇州プロジェクトチームの荘雪吟（ジュアン・シュエイン）さん、楊華（ヤン・ホワ）さん、郭奕艶（グオ・イーイエン）さん、莫佳妮（モー・ジアニー）さんらは、毎日テレワークに励んだ。また、広州では唐さんと張さんをはじめ李紅莉（リー・ホンリー）さん、傅金花（フー・ジンホワ）さん、呉広超（ウー・グアンチャオ）さん、林春燕（リン・チュンイエン）さんらが毎日慈済広州天河の事務所に集まり、業者の選定、資格審査、サンプル確認、契約締結、税関申告、国際物流といった一連の作業を分担して行った。彼らは朝から晩まで電話をかけ続け、時間と競争して感染予防物資を競って買い付け、海外の急を要する地域へいち早く届けた。

調達チームは結成されたが、多くの問題に直面した。まず工場では原材料が不足し、物価が高騰した。また、感染予防物資の輸出には各種の許可証が必要だった。国際便の運行も減少し、貨物ターミナルは物資で溢れているのに、税関の検査は時間がかかり、どの便にどれだけ積載可能かもなかなか決まらない等の様々な試練に見舞われた。

調達チームのボランティアメンバー

は、医療物資についても、海外貿易や国際物流についても、まったくの素人だった。だが、毎日膨大な情報に接しながら、大量の電話による商談と買い付けの任務をこなさなければならない上に、世界各国の連絡係や税関の勤務時間に合わせる必要もあり、毎日の仕事は重労働だった。更に、次から次へと変化する状況にも対応しなければならず、責任者の唐さんは、しばしばこう言って仲間を励ました。「私たちは国際貿易の門外漢だけど、一つ一つ学んでいこう。困難に直面しても、法師が花蓮慈済医院を創設した当初の艱難を思えば、私たちの苦労などとるに足らないことのはずだ」。

業者と電話する時、ボランティアはいつもこう一言付け加えることを忘れなかった。「私たちは商売をしているのではありません。皆さんと共にウイルスの脅威と戦いたいだけなのです……」。すると、この愛に満ちた一言が彼らの愛を呼び覚ましたのか、寄付や物資の寄贈、輸送費の負担といったそれぞれの善行で応えてくれた。感染が拡大する中、誰もが運命共同体なのだ。

⬅広州ボランティアたち6名が、慈済広州天河支部に集まり、感染予防物資の調達に力を尽くしていた。（撮影・謝奉恩）

夜が明けるまで感染対策に励む

感染症が拡大すると、広州空港電商国際産業パークの国際物流ターミナルで取り継がれるのは、いずれも感染予防物資ばかりだ。広州を中継地として積み替えられる物資の箱には、慈済のラベルを貼り付ける必要があった。これは、慈済の愛を伝えるためであり、たくさんの荷物があふれる倉庫内で、慈済の荷物を識別しやすくするためでもあった。

昼間は倉庫業務が繁忙なため、慈済の感染予防物資の受け取りと荷卸し、そして箱にラベルを貼る作業は全て、夜十時以降に行う必要があった。広州のボランティアたちは数十回にわたって国際物流ターミナルに通い続け、明け方まで作業を続けることも少なくなかった。

四月二日、中国で調達した感染予防物資が、初めて広州白雲国際空港を中継地として飛び立った。十名余りの広州ボランティアが広州白雲国際空港の国際物流ターミナルでラベルを貼り、物資を整理して、慈済の愛を海外で感染症と戦っている第一線へ送り出したのである。

四月十八日の夜、吉林省の長春市から広州市へ防護服が届いた。広州とその近隣都市の仏山市のボランティア三十名余りが、広州空港電商国際産業パークに集まった。夜の十時半から、皆で協力して荷下ろしや倉庫への搬入を始め、夜中にようやく仕事を終えた。この千二百五十六箱、重さにして十二トンの防護服は、フィリピン、ホンジュラス、モザンビーク、ネパール、シエラレオネ共和国など六カ国へ届けられるものだった。

午前一時、帰路に着いていたボランティアたちに、また連絡が入った。更に八百三十五箱の手袋を倉庫へ搬入する必要があるという。十人のボランティアたちは広州空港電商国際産業パークに引き返して物資の搬入を行い、作業は午前三時にようやく完了した。これらの医療用手袋は、イタリア、スペイン、南アフリカ、レソトの四カ国へ送られるものだった。

午前三時まで物資の積み替え作業を手伝っていた呉威毅（ウー・ウエイイー）師兄（スーション）が最も気にかけていたのは、アメリカに住んでいる両親のことだった。「家でニュースを見ながら心配しているより、物資の積み替えに力を尽くす方が、気持ちが落ち着きます。この作業の手伝いができて、本当に良かったと思っています」。

四月二十五日、フィリピンのセブ・パシフィック航空のチャーター便が広州白雲国際空港に降り立ち、感染予防物資を積んで戻ってきた。こうして千八百三十箱、五万着近い防護服と、二千個の防護フェースシールドが、第一線の医療スタッフのもとへと届けられた。

曽峰（ゾン・フォン）師兄は感染予防物資の積み替え作業に、ほぼ毎回参加した。交通係、総務、人文真善美（撮影記録係）、香積（炊き出し係）など、その時々で人手が足りない業務を補っていた彼は、こう語った。「コミュニティの師姐（スージ

エ）たちは空港での仕事には縁はありませんでしたが、皆の体力を補うために饅頭（マントウ）を蒸したり、お菓子を作ったり、お汁粉を煮たりしてくれたので、私が届けました。大量の食料を軍隊の最前線に送ったような気持ちでした」。大愛を抱く慈済人の団体で一緒に奉仕すれば、どんなに忙しくて疲れても、心は喜びと感謝で満たされる。ウイルスの感染リスクの中でもしっかりと予防措置を取っていれば、恐れることはないのである。

⬆ボリビアのサンタ・クルス市の病院が、慈済の寄贈した人工呼吸器と医療防護設備を受け取った。それらは病室で使えるだけでなく、救急車に設置して使うこともできる。（写真提供・謝禎祥）

変化球を受け止めながら務めを果たす

広州の天河連絡所でも、同じように毎日途切れることなく、感染予防物資の買付けと発送を繰り返していた。一階と二階の限られたスペースには、呼吸器、隔離服、マスク、体温計などの物資が整然と並べられ、次の発送を待っていた。ここは、まさに愛の中継地なのだ。

中国における感染状況は徐々に収まってきていたが、広州市の各種禁止令はまだ解除されていなかった。輸入相手国の感染予防物資に対する品質要求や輸出する物資の品質保証などに対して、税関は四度にわたって規定を変更し、ボランティアは税関の検査基準を満たすため、いつでも変化球を受け止めなければならなかった。ラベルの張り替えや許可証の内容の付け加え、更には中国語と英語による説明書の補填などをした。

職員の林春燕（リン・チュンイエン）さんはこう語った。「この期間中に呼びかけると必ず一に対して百の反応が返ってきました。三、四人の人手が欲しいと言えば十人が、空港で二、三十人足りないと言えば四十人が集まってくれたのです。まるで菩薩が地から湧き出てくるようでした。そういう反応や力というものは、とても不思議なものです。チームの

みなさんの努力に心から感謝します」。

ボランティアはいつもこう語る。「一人でも多ければそれだけ力は増します。海外の感染状況が深刻な時、私たちにできることは限られていますが、人々の役に立てる機会が得られたことにとても感謝しています」。韋利娟（ウェイ・リージュエン）さんは幼稚園の先生だが、感染症対策で休校になったため、毎日天河連絡所で待機しながら物資を整理し、雑務をこなしていた。「それは静思の弟子として行うべき務めです」と彼女は言った。

慈済は、八十カ国以上の国々に感染予防物資を送って支援する計画を立てている。この二カ月余り、航空便やチャーター便、国際宅配便などによって、既に七十カ国近くの国へ物資が届けられた。感染症による影響は非情だが、人間（じんかん）には愛がある。中国の感染状況が深刻だった時、海外の慈済人は無私の支援をしてくれた。海外の感染状況が深刻になった今は、中国のボランティアたちがその縁により力を尽くして、敬虔な心で使命を果たそうとしている。感染症が一刻も早く収まり、あらゆる人に平安な日々が訪れることを心より願っている。（慈済月刊六四四期より）

門外漢の調達奮闘記

感染予防物資は購入するというよりは、奪い合っているような状況だった。業者の店先は物資を買い求める人でいっぱいだった。期待を抱いて業者に連絡しても断られることが多く、昼間はいつも電話を掛ける仕事に追われた。

文・唐惟良（慈済基金会蘇州職員）　訳・有田夏子

今年の旧正月の大晦日、私と妻の張玲は下の娘を連れて広州からマレーシアとインドネシアへ観光旅行に出かけた。一月二十七日にバリ島に到着したが、その翌日の早朝、慈済が全世界でボランティアを動員し、感染予防物資を集めて、感染症が広がった地域の医療スタッフを支援していることを知った。私たちは直ちに観光の日程を切り上げ、馴染みのないバリ島で医療用マスクを探し始めた。

言葉が全く通じない異国の地で、電子マップと翻訳ソフトだけを頼りにマスクの売り手を探し、そして、医療用としての基準を満たしていることも確認する必要があった。夕方、バリ島のヌラ・ライ国際空港に着き、マスクを輸送してくれる航空会社を探そうとしたが、広大な空港では中国語を話せるスタッフが一人もいなかった。成す術がない状況に、心がくじけそうになった。

言葉が通じないうえに、国際輸送の手続きはとても複雑だった。お腹が空いて疲れきった私たち一家は、空港で途方に暮れた。そんな心細かった時に手を差し伸べてくれたのが、中国南方航空の湖南支店、マーケティングセールス部の王美水（ワン・メイシュイ）師兄（スーシオン）だった。彼が各機関と迅速に連絡を取ってくれたおかげで、お互い初対面のメンバーからなる臨時の調達チームが結成された。そして、ついに第一回目の物資を飛行機に載せることができたのである。

私たちは、バリ島に残って調達を続けることにした。予約したタクシーのアリーさんという運転手は、私たちが中国から来たことを知ると、すぐにマスクを着け、あからさまに私たちと距離をとろうとした。だが、私たちが慈済ボランティアであること、そしてマスクを調達して医療スタッフに寄贈しようとしていることを知ると、彼は「慈済のことは知っています。インドネシアで良いことをたくさんしています」と言った。

彼のよそよそしい態度が一変して、私たちの物資調達にも熱心に付き合ってくれるようになった。こうして、私たちのチームに新たな戦力が加わった。また、ずっと困っていた言葉の問題についても、ようやく助っ人が見つかった。インドネシア留学生のミス・ベンティが、ボランティアで通訳をしてくれることになったのだ。

私たちは毎日、予防物資を求めて歩き回った。店舗はどこも売り切れだったが、何度も不思議な縁に導かれて、医療用品の卸し業者にたどり着いた。そのおかげで私たちは、医療用マスクを次々と購入することができた。だが、世界のコロナ禍の状況は刻々と変化し、インドネシア政府は二月五日より中国直行便の運行を停止すると発表したため、私たちは調達した物資をその期日までに飛行機に載せなければならなくなった。

搬送手配、税関申告、通関手続き及び各機関との対応等それぞれの場面で、長沙市、広州市、ジャカルタ、バリ島の慈済ボランティアたち、そして花蓮本部の師兄と師姐（スージエ）の皆さんによる熱心な指導と協力をいただいた。おかげで私たちはインドネシアでの八日間に

三十二万七千点余りにのぼる医療用マスクと医療用手袋を調達し、それを直ちに中国国内へ発送し、感染防止の第一線で働く人々のもとへ届けることができたのである。

今までの生活では、マスクはありふれたものに過ぎず、コストは一枚あたり一元にも満たなかったはずだ。地面に落ちていても拾おうとする人のいない一元硬貨を思わせる。だがこの春節の間に、その取るに足らない日常品が、人々が求めてやまない「贅沢品」になったのだ。

慈済人の一家と、愛で結ばれた臨時チームのメンバーは、バリ島でマスクを探しまわり、人々へ送り届けることに奮闘した。愛の力が結集した故に、不可能を可能にしたのだ。私たちに協力してくれたすべての人に心から感謝の言葉を捧げたく、ここに記す。

苦労の中に喜びを見出す

私は昨年の十一月に機会があって仕事で広州へ派遣され、一家で広州に移り住み、フルタイムの慈済ボランティアとなった。今年二月にインドネシアから広州へ戻った後、本部の宗教処の指導のもと、感染予防物資調達チームを結成した。

最初にしたことは、業者を選定することだった。感染予防物資はひどく不足しており、人々はそれを購入するというよりも、奪い合っているような状況だった。業者の店先はいつも物資を求める人でいっぱいだった。期待を抱いて業者に連絡しても断られることが多く、昼間はいつも電話をかけることに追われた。

感染予防物資は品目が多く、またヨーロッパのＣＥ基準やアメリカのＦＤＡ基準など、守るべき基準も多い。初めは何も知らず、やっと基準に合う業者を見つけたと思って興奮して台湾に報告したが、皆で詳しく調べた結果、やはり基準を満たしていないと判明したこともある。そんな時は、一瞬にして谷底に突き落とされたような気がした。

多くの人々が愛をもって指導と協力にあたってくれたことに、心からお礼を申し上げたい。私たちは多くの見知らぬ業者の中から次第に主要な取引先を見つけ出した。だが業者を選んだ後、複雑で気を揉むような契約の問題が待っていた。感染予防物資は、全額を支払った後でなければ発送されないため、信頼できる業者かどうかを見極めなければならない。多額の慈済の善意からなる浄財を支払いにあてるのだから、取引の安全性を確保

することが新たな課題となった

各地の慈済人たちが視察し、業者の監査、契約、物資の検収といった仕事に参加してくれたこと、そして業者を選ぶ際には第三者の実地視察を行うよう提案してくれたことに大変感謝している。それから、私たちが決断を迷った時に、いつも問題の本質を指摘し、私たちが五里霧中にあっても、数多くのリスクを避けて通るようにしてくれた本部の宗教処の皆さんにも改めて感謝の気持ちを伝えたい。

私たちは百社以上の業者と商談し、そのうち二十数社と契約を交わした。そしてこれまでに一千万人分以上の感染予防物資を購入し、八十カ国以上の国へ送り届けた。

三月の中旬から調達が始まると、毎日がとても忙しくなった。皆が早朝の三時か四時には起床し、静かに数字を整理したり原稿を書いたりして、昼間の調達作業に備えたりすることも多かった。それは簡単な仕事ではなかったが、慈済で長年鍛えられたおかげで、最も苦しい時にも心に一筋の光を見出すことができた。そして證厳法師がおっしゃった「解決策は問題よりも多いはず」という教えを信じ、愛が問題を溶かし去ってくれると信じることができた。

物事の困難さはそれほどではないと思われたが、人間関係の難しさが課題だった。臨時に結成された調達チームのメンバーは、お互いに初めて一緒に仕事をする人ばかりで、しかも仕事の内容は専門的で時間が限られており、こなさなければならない事が多く、それらの繋がりも複雑な上に、誰もが自分の意見を持っていたからだ。

仏はこう言っている。娑婆の衆生は自我が強く、他人の言葉を素直に受け入れ

⬆広州白雲国際空港の駐機場への出入を許可された広州の慈済ボランティアたちは、フィリピンのセブ・パシフィック航空の貨物便として手配された旅客機に乗り込んだ。貨物室が感染予防物資で満たされると、唐惟良（左）とスタッフたちは協力して乗客用座席に防護服を運び入れた。

（撮影・李紅莉）

がたい。一人一人意見を譲らず頑固なのである。困難とプレッシャーに直面した時、柔軟さを堅持しながら、効率よく問題を解決し、きちんと結果を出すのは大変難しい。私は、證厳法師の「十在心路」の教えをいつも心中に思い浮かべている。

幸いにもこの七年間、人、事、道理において調和が取れ、困難を機に心を磨くように、と言う證厳法師の教えをよく耳にしていた。時間が経つにつれ、皆の心は一つにすり合わされて成長し、気づき、反省し、仕事を通じて心を磨いてきたので、次第に全てが順調に進むようになった。このような任務の機会を与えられたことに、私はとても感謝している。専門的で複雑な仕事をこなし、プレッシャーの中で自分を鍛えながら、自分自身の人間性の弱さに気づくことができた。そして、無明を破り、それを徳に変え、より良い自分に出会うこともできた。

この二カ月間の仕事を通じて、證厳法師のおっしゃった言葉が少しずつ理解できるようになった。「生活は仕事のためにと考えて日々の仕事に没頭していると、生活を忘れ、今日が何曜日であるかさえ気にしなくなる。毎日が同じように、ごく単純に、忙しく過ぎていく。以前、仕事は生活のためにするものだと考えていたため、毎日がとても辛かった。今、生活は意義のある仕事をするためにある。毎日苦労していることに変わりはないが、苦労の中にも喜びを見出すことができるようになった。だから、苦しい生活を送っていても、苦しみを感じることはない。苦しさの中に、喜びを感じることができるようになったのだ。

申し訳なかったのは、幼い娘に対してである。毎日、師姐と一緒に支部に行かなければならなかったので、しっかり者の娘を一人で家に待たせていたからである。十二歳になる娘は、学校がまだ始まらないので、家で一人オンラインの授業を受けたり、自分で弁当を注文して食べたりと、自宅にひきこもりがちの生活を送った。家の中ばかりで大丈夫だろうかと心配もしたが、彼女は自宅でいたって充実した時間を過ごしていたようである。

毎日感謝の気持ちを忘れずに過ごしていると、證厳法師の言葉がよりよく理解できるようになる。感謝の言葉は、いくら伝えても足りない。一人一人全身全霊で仕事に取り組んでくれた調達チームの皆さん、そして私たちを忍耐強く支えてくれた師兄と師姐の皆さんに、心からの感謝の気持ちを伝えたい。

（慈済月刊六四四期より）

【證厳法師のお諭し】

天理に順じて衆生を護りましょう

◎訳・慈願　絵・林淑女

日常生活が道理に適っていれば、天理も自然と順調になります。
この世が平安であり、人類が共に福を造って
萬物生霊を愛おしむよう願っています。
菜食は愛の心を育み、菜食する人が多ければ福も多くなります。
「幸運」という保護膜を強固なものにしましょう。

新型コロナウイルスの感染症は未だ収束しておらず、半年余りも目に見えず、居場所もわからないウイルスが世界を覆っています。今年の気温は例年よりもかなり高くなっています。諺に「五月節句の粽を食べないうちは冬物をしまうな」とあります。しかし、今年は端午の節句の一、二カ月前からとても暑くなりました。この数年来、地球の気温は上昇し続け、極端な気象現象は益々酷くなっています。

最近、日本の九州やマレーシアのジョホール州、中国の多くの省が水

害に見舞われました。大自然の瞬時にしてあらゆる物を破壊する威力を目の当たりにして、人力のなんと微小なことと痛感しました。どれだけの家庭が苦難の憂き目に遇っているだろうかと思うと、私はとても心配になりました。

中国では二十余りの省が被災し、度を越した雨量が急流となって流れ、山々を崩落させ、道路を寸断しました。家々は押し流され、恐れおののきながら避難した人々は薄いテントの中で酷暑に堪えていました。四川省の涼山彝（い）族自治州西昌市で土石流が発生し、冕寧県彝海鎮では河の流れが変わって災害を引き起こしたため、慈済ボランティアはそれぞれ、調査と配付に駆け付けました。洪水が引いた後も道路は前に進めず、ボランティアは泥濘んだ泥に足を取られながら、一歩一歩慎重に進みました。前方には助けを必要としている人々がおり、戻るわけには行きません。直ちに緊急の配付をしなければならないのです。

世の中に広く目を向けると、多くの国で自然災害が発生しています。大自然の不調和だけでなく、苦境に陥っている多くの人々は、戦争や貧困のために居場所を無くしています。大勢の難民が海上を漂流し、各国は防疫のために国を封鎖して難民の上陸を拒んでいます。過積載で漂う船体は波風に耐えられるでしょうか？今日ある命も明日はどうなるか分かりません。とても心配です。

私たちは平穏な暮らしできる幸せな日々に感謝しなければなりません。幸せを知る人は、もっと幸せを造り、「幸運」という保護膜を強固なものにするのです。天地を敬い、福を造って災害を減らすのです。福を造らなければ災害は減りません。どうすれば平安を護れるのでしょうか？愛の心を育むのですが、それも完全な愛でなくてはなりません。善行や献金だけでなく、あらゆる生命を護ることが大切なのです。

菜食すれば、生活の中で愛の心が育ちます。この世の平安を願い、人類が共に幸せを造るということが愛なのです。苦難の環境に陥っている衆生を苦から救うだけでなく、目の前に存在している生き物も大切にして愛護するのが真の愛というものです。万物を守ってこそ、人類は万物の霊長と言えるのです。

計算によると、五百個の弁当を作るには、三十八羽の鶏と百二十キロの豚が一匹必要です。花蓮の慈済大學附属

小学校の陳映儒（チェン・インルー）さんは「菜食を早く広める」活動を発起し、一人が一人に勧めるのです。これまで花蓮慈済小学校の先生と児童が三万六千食余りの菜食を勧めており、換算すると二千余りの鶏と豚の殺生を減らしたことになります。食べられなかったこれら動物がどんなに自由自在に歩き回っていることか想像できると思います。反対に一瞬にして人類の口の欲のために屠殺される怨念は絶えず累積し、最終的に人類に反撃します。

五穀を食べていると身心ともに清浄になり、三度の食事で生き物に借りを作ることもありません。殺さず、食べなければ、飼育せずに済み、数多くの動物を飼育することで大地と空気を汚染することもありません。菜食は気候の変動を緩やかにすると同時に、最も敬虔な気持ちの表れです。皆さんが、子供たちのように、一人が一人を誘い、皆で生命を護って福を造ることに期待しています。口の欲を抑えて動物の肉を食べず、相手を怯えさせないようにするのです。

その道理は簡単であっても、無明の貪欲をなくすのはとても難しいのです。日常生活が理に適っていれば、天理は自ずと順調になります。良知の本性を啓発すべきです。智慧の「智」という字は「知」っているだけでなく、「日」の光明を持って道理をわきまえることができ、そこから善行を啓発して他を利するのです。

人は自分を軽く見るべきではなく、その力が結集すれば、大きな力となります。今は「非常時」ですから、少人数の行動だけでは効果は出ません。皆が心を一つにしてこそ、異常を正常に戻すことができるのです。道理が分かっても、一人でやり遂げるだけでなく、自分も他人も目覚め、まだ解らない人に聞かせて理解させ、口伝えで人々が規律を守るようになってこそ、気候は穏やかになり、感染症も終息を迎えるでしょう。

毎日、懺悔と菜食、感謝の三つを続けなくてはなりません。過去の積み重ねに感謝し、懺悔して生活習慣を改め、完全に菜食するのです。菜食する人が多ければ、それだけ世の中は幸せになり、菜食を勧める分だけ功徳があります。誰もが人、物を愛し、生命を守るようになれば、この世は平穏で幸福になるでしょう。皆さんの精進を願っています。（慈済月刊六四五期より）

回家

毎年、
何千何万もの慈済人が
ただ心の故郷に帰する為に
諸々の困難を克服して
渡り鳥のように帰ってくる。

推薦新書・『家路につく（回家）』

メキシコの野村賢

文・鄭茹菁　訳・惟明

「私は十四歳の時、将来は慈済の一員として、異国の地で善の種子になりたいと立願しました。その道のりは決して楽ではなく、責任の重い遠い道であることは分かっていましたが、自分は必ずこの立願を果たせると堅く信じていました」。

多くの世界遺産を擁し、スペイン植民地時代の面影が残るメキシコは、治安が悪いことで世界にその名を知られている。野村賢さんは縁があって歴史の教師としてメキシコの国際学校に赴任した。「家路」を指し示すコンパスの針が野村さんを導いたのは、苦難に喘ぐ人々を忍びなく思う心からだった。

二〇一七年九月、メキシコをマグニチュード七・一の強震が襲った。当時メキシコで教鞭を取っていた野村さんは直ちに慈済に支援を要請した。間も無く彼の所に慈済から返事があり、メキシコまで震災の視察に来ることを了承してくれた。そして、同年の十二月から支援活動が展開されることになった。彼は休暇をとってメキシコシティに飛び、慈済ボランティアと合流して災害支援に投入した。

彼は通訳兼ボディーガードで、慈済ボランティアが行く先々には必ず彼の姿が見られた。そして瓦礫と化した街々で、スペイン語、中国語、英語の通訳をして、ボランティアとメキシコ人の橋渡し役となった。「私はやっと人生の目標を見出しました。慈済の四大志業を受け継ぐ為にメキシコに残る決心を固めることが出来ました」と彼は嬉しそうに言った。そしてもっと多くの善の種子が大愛の隊列に加わるよう導く任務を自分に期待した。

学んだ事は必ず役に立つ

日本人の父親を持つ野村さんは台湾で生まれた。父親の転勤の為に幼児の頃に両親についてマレーシアに移り住んだ。

一人っ子で早く大人になりたかった野村さんは、いろいろなものに興味を示す意欲的な子で、母親は彼のヒロインと言える存在だった。彼女は異国で生んだやんちゃ坊主を育てるだけでなく、見捨てられた動物を助けていた。

野村さんは動物虐待防止協会（ＳＰＣＡ）のボランティアをしていた母親の背中を見て育った。彼女は忍耐強く野良犬の体を洗って蚤を取ったり、毛並みを整えたりした。マレーシアに滞在した二十年近くの間に、母親が世話して新しい飼い主を見つけた野良犬と野良猫は数百匹にも上った。

彼はまた、母親がマレーシアの視覚障害者の為に仏教の物語を録音しているのを見ていた。どんなに忙しくても、毎週必ずチェラス地区の孤児院に行って孤児の面倒を見る母親の背中から慈悲と無私の奉仕を学んだ。

小学校になると日曜日は慈済のリサイクル活動に参加し、少し大きくなってからは母親について慈善家庭訪問に行った。中学校の時、三泊四日のサンマーキャンプに参加する為に台湾に帰った。そのキャンプが彼にとって人生の転機となった。

当時十四歳だった彼は、初めて水不足、飢餓、親孝行、国際災害支援などの問題

に触れた。彼はその時初めて、自分にも世界を救う責任があることに気付いた。まだ年齢は若かったが、慈済に人生を捧げることを確信した年だった。

定年退職したエンジニアの父親は、どこまでも彼の後ろ盾になった。母親が彼をアメリカに留学させようとした時も、父親は無条件で経済援助をした。典型的なアジア系の親として、息子が将来の人生に備えられるようにと彼らは出来る限り教育に力を注いだ。

十八年間、住んだマレーシアを離れ、彼はアメリカのミネソタ州立大学に進学した。国際教育を専攻し、歴史の教師になることを目指した。卒業後は社会研究教師の免許を取得した。これで卒業後はどの国でも教員として赴任できることになった。

彼がミネソタ州に着いた時、そこにまだ慈済はなかった。彼は慈済家庭に育ち、大学でただ一人の慈青（慈済の青年ボランティア）となった。国際結婚家庭に生まれて多様な文化の洗練を受けた自分を、幸運児だと思っている。特に中国語を母国語として成長した彼は、「上人の著作が読めることは、私の人生で最大の幸せです」と言う。

二〇〇九年から二〇一二年まで、大学

生だった彼は毎年花蓮で行われていた世界慈青キャンプ（世界中の青年メンバーが参加する修身キャンプ）に参加し、数カ国語が堪能な彼はそこで通訳をした。慈青キャンプでの講座は、多くが国内外の志業の責任者たちによる経験談の共有で、菩薩道に向かう青年たちの堅い志を励ました。そのような養成の日々は、彼が菩薩道を歩む信念を堅くさせた。

野村さんは中国語、日本語、英語とスペイン語に精通しているが、それは「才能」というよりも両親の「堅持」から来たものと言える。子供の頃の野村さんは日本語が最も得意だった。アメリカ留学の関係で英語力がつき、慈済の洗礼もあって中国語も非常に上達した。スペイン語は以前の選択科目であまり力を入れていなかったが、メキシコに教員として赴任してからは会話だけでなく読み書きまで上達したため、それが災害支援で力を発揮したのである。

「あなたがマルチ・リンガルで、世界を駆けめぐれるのは、きっと前世で世界を舞台に何か大仕事をしたのですよ」と母親は彼に言った。母親は野村さんに語学という特技を活かして天下の衆生の為に尽力と貢献をするようにと励ました。

慈少（慈済の少年メンバー）時代から

野村さんは将来異国で慈済の種子になると発願していたが、彼は自分の信仰に疑いを持ったことはない。決して楽な道のりではなく、むしろ遠くて重い任務だと知りながらも、立願は必ず叶うと固く信じていた。彼の語学力とリーダーシープとしての才能は自分の利益を追求する為ではなく、必然的に他人の為に使われるのだと信じていた。

●野村賢さん（左から2人目）はメキシコ・ソチミルコの火災現場に行き、被災者に支援物資を配付した。（撮影・Amelia Cornelis Manuel）

幸せな彼岸へと導く役目

大学卒業後、彼は両親の勧めで、兵役を終えるために台湾に戻った。一年間、空軍に配属されたが、駐屯地は自宅のある台北近くだった。兵役に勤務しながら、基隆で慈済ボランティアになる養成講座に参加した。慈青だったことから、一年目の養成講座は免除され、直接二年目の講座から入った。

彼は上手く予定を立てて、いつも軍の休暇を利用して講座に参加したため、兵役が終わる頃には講座も終えた。證厳法師の手から認証を授かり、法師に改めて「三十歳になる前に、私は行ったことのない国に出かけ、異邦で慈済が根付く種子になります」と誓った。

法師は野村さんを祝福し、「肩の荷は重くなり始めましたか？リーダーになる前に、誠正信実㊟な人になりなさい」と彼を励ました。その瞬間、彼は慈済が自分の使命であると一層強く確信した。

㊟：「誠」とは真、「正」とは公正、「信」とは自信、「実」とは正直を表す慈済の基本精神。

慈済人として認証を授かってから、野村さんは再び旅に出た。専攻が「国際教育」だったため、世界中の多くの学校に応募した。最終的に、彼はメキシコ・ドゥランゴ州の学校と最初の仕事の契約を結び、教師と世界を探求する夢の旅が始まった。

メキシコに赴任した最初の三年間、彼は辺鄙なドゥランゴに住んでいた。三年目の時、彼はカナダから来たマーニー・アンダーソンという女性と出会った。二人一緒に慈済の道を歩むようになり、彼女はメキシコにおける国際施療の後方部隊の仕事をした。彼とマーニーは別の国で教師の仕事を探すつもりだったが、思っているほど簡単ではなく、最終的にはメキシコの別の町モンテレイに移り住んだ。

二〇一七年九月十九日、メキシコシティと南部地方でマグネチュード七・一の強震が発生した。野村さんとマーニーは災害支援の主力チームに参加し、被災者に購買用プリペイドカードを配付する手伝いをした。メキシコシティで行われた活動は一日の内に何千何万もの心を感動させた。メキシコ国歌を斉唱した時、野村さんの目に涙が溢れた。過去三年間、月曜日には必ず学生が斉唱する国歌を聴いていたが、何故か彼は慈済の活動現場でそれを聴くと涙が止まらなくなった。

自分は既に三年間、即ち千日以上もメキシコに住んでいることに気づいた。その間、数え切れない程メキシコ人の助け

を受けていたが、ボランティアによる恩返しはその僅か何万分の一に過ぎず、それに幾ら努力して学生を教えても、一年でせいぜい百人の学生にしか影響を及ぼすことはできない。それではつりあわない。「長期間メキシコに留まって慈済の志業を行ってこそ、法師の教えを広め、メキシコ人を幸せにすることができるのだ」と彼は涙を流しながら自分に言い聞かせた。

「あなたが心から発願すれば、その願力は天に届き、願いが叶うのです！」とあるボランティアが野村賢に言った。自分が歩んできた様々な因縁を思い返すと、母親の先見の明に感服せずにはいられなかった。野村さんは中国語での作文があまり得意でなかったが、母親は彼に練習を続けさせた。又、十六歳の時、高校の選択項目で全く繋がりのないスペイン語を選んだことや、どうしてメキシコ以外の国で仕事を探さなかったのかなど、その全ては自分が大きな使命を担うための巡り合わせなのだと信じている。

メキシコで初めて慈済チームを設立した時、彼は現地で唯一認証を受けた男性ボランティアだった。ある時会議で「慈済の育てる大きな種」に選ばれ、自分が学んだボランティア養成コースや国際災害支援に参加した経験について皆と分かち合った。自分が数年前に法師に発心立願した誓いの言葉を遂に実現できたのだと感じた。

もっと効率的に志業を広げる為、彼はマーニーとメキシコの首都に教職を見つけ、慈済の活動会場の近くに引っ越した。二〇一九年八月までに、彼らはメキシコシティとモレロス州で行われた国際施療に七回参加し、現地に居住するバイリンガルの学生に現場での通訳に参加するよう呼び掛けた。その中の多くは彼の教え子だった。

野村さんはカンボジアの慈済ボランティア・林佳宏（リン・ジアホン）さんをとても尊敬している。「私はカンボジアに残り、カンボジア人を済度します。最後の一人が苦しみから逃れ、幸せを得られるまで頑張ります」と林さんは発願していた。

自分は十四歳の時に法師の教えを広める為に将来、慈済ボランティアになると発願した。三十歳を前にしてその誓いを叶えることができたことを野村さんは幸せに思った。慈済は彼の変わらぬ信仰である。異郷の最後の一人が幸せな彼岸に渡るまでメキシコに留まることができるよう願っている（慈済道侶叢書『回家』より）

台湾全土では8万8千人の慈済リサイクルボランティアが約9千カ所のリサイクル拠点で回収資源の分類を地道に続けている。皆、学歴や生活背景にとらわれず、無報酬で取り組んでいる。奉仕の労力や苦労を語らず、大衆に物を大切にし、大地を愛しむよう呼びかける。子孫代々に美しい地球を残したいだけなのである。

◎文・黄筱哲、蔡瑜璇　撮影・黄筱哲　訳・善耕

大地の守護者

毎年廟に来て福をもたらす

二〇二〇年の春節の休みには、多くの人と同じように「走春（日本の初詣）」という習わしで台南市にある鹿耳門聖母廟に行った。その媽祖廟は多くの参拝者が供える線香から立ち上る煙が巨大なことでその名を馳せている。春節や吉日には各地からの信者や観光客が訪れ、香を焚いて神様を祀り、平和と幸福を祈る。

毎年、旧正月の初日から五日までは観光客の数が最も多く、一日平均延べ十数万人が訪れる。廟の同意を得て、慈済ボランティアは展示ブースを設置し、五日間続けて交代で参拝者に環境保全と静思語を紹介した。また、リサイクルボランティアの姿も呑み込まれそうな人混みの中で際立って見られた。廟の前の石獅子（せきし）脇でボランティアが腰をかがめて、ごみでいっぱいになった袋から回収可能な資源を探していた。そこにある資源はボランティアの目には宝の山に映り、回収するのはお金が目的ではなく、心が休まるからである。彼らは地球への負担を減らすことを何よりも重要だと考えているのだ。

一年に一度の春節にもかかわらず、甘んじて休みを返上して喜んで大衆と良縁を結んでいる彼らの精神に、私は敬服した。彼らは「作業の間は疲れますが、終った後は充実感を感じます」と言った。おそらく、それはボランティアにとって「心」から新年を喜びあって過ごすという形なのであろう。

加護、祝福、平和を祈願する

新型コロナウイルス（ＣＯＶＩＤ－１９）の感染が多くの国に広がったので、今年、廟にお参りに来る人は皆マスクを着け、感染予防の中で、自分と家族のために敬虔に線香を上げて無病息災を祈っていた。

この廟には「鑽轎脚（神輿くぐりのこと）」と呼ばれる伝統的な儀式がある。信者は神様が乗る「御神輿」の下を這って潜り抜けるのである。それは神々を尊重し、

ひいては疫病や病苦や厄災から解放されるよう加護と祝福を祈るものである。信者が次々と「神輿くぐり」のために列をなしている間、慈済のリサイクルボランティアは傍で一刻も休むことなく、ゴミ箱の中から回収可能なものを拾い続けていた。リサイクルに精を出すことで環境汚染を減らし、地球の健康を守っているのだ。證厳法師は「リサイクルボランティアが環境を守り、捨てられた資源を回収して再利用するのは、地球を守るだけでなく、人類をも守っているのです。環境保全活動は善行であり、自分にも幸福をもたらしているのです」と言ったことを私は覚えている。

楽しいエコゲーム

廟の境内はとても広い。本堂の大雄宝殿に行くと、格別に子供たちの目を引くエリアがあった。ボランティアが回収した紙ロール、段ボール、卓球などを使ってエコ・パターゴルフ場を作ったのだ。子供たちは竹竿でできたパターを使い、ボールをカップに入れると次のコースに進むことができる。一連のゲームには健康的な食事、節水方法、菜食の利点、環境に優しいマイ食器の携帯などのテーマが盛り込まれている。それは慈済ボランティアの呉麗姮（ウー・

リーホン）師姐（スージエ）のアイデアで、彼女は理論や知識を楽しいゲームに変えて興味を引き出し、体を動かして達成感が得られるようにした。理論的な教育より遊びながら学ぶ体験の方が教育の効果は著しい。

さらに、彼女は自ら現場に行って人々とふれあい分かち合った。三世代（祖父母、父母、子）が一緒に集まる機会は多くないと知って、彼女は楽しく学べる活動を通じて、子供たちと交流するだけでなく、家中の年長者と交流することもできれば、とても有意義だと考えたのだ。来年はより多くの人と縁を結ぶ機会を得て、環境保全と健康を生活の中で実践できることを期待した。

春節の休み

正しいことは堅持して行う

聖母廟の近くに住んでいる慈済ボランティアの周淑茹（ジョウ・シュールー）師姐（スージエ）は、以前、元宵節（旧暦一月一五日）の後、廟に大量のゴミが残っていたのを見て、リサイクルボランティアの精神を發揮し、一人で回収可能なものを拾い集めた。そして二〇一〇年、黄惠珠（ホアン・フイジュー）師姐（スージエ）と他のボランティアを誘って、春節の休みに廟でリサイクル活動を始めた。今年で満十年になる。

春節の休み

淑茹師姐は感じる所があってこう言った。毎年の活動では人手が要るのだが、春節期間はボランティア自身もそれぞれ家庭の行事で忙しい。また、ボランティアの交通安全を配慮しなければならない上に、自分自身も計画を立てて段取りをつけることが得意でなかったため、春節の休日が近づくと気が重くなり、一度は活動を止めようかとさえ思ったこともある。気分がむしゃくしゃすると、彼女は敬虔に菩薩に祈った。『静思語』を開くと丁度、「どんな分野にいても、持ち場を堅守して精進すれば成功する」という言葉を目にした。強心剤のようなその文句は師姐にあれこれ考えることを止めさせ、正しい事を堅持し続けさせた。

今日の廟はいつもと変わらず、人出も通常通りだが、淑茹師姐の環境保全に対する考えは変わらない。そして、一群のボランティアが活動に協力してくれている。会場の準備から回収物の運搬、ゲームの設計、環境保全の呼びかけに至るまでそれぞれが持ち場で励んでいる。それは師姐が最も感謝し、喜びを感じていることである。（慈済月刊六四〇期より）

わだかまりから一歩先に踏み出す

◎文・張素雯（カナタ・トロント慈済ボランティア）
訳・葉美娥

異文化の誤解から生じる人種差別をなくすことはできないかもしれないが、一歩前に踏み出して、相手に自分の肌の色を見せると同時に自分の教養も見てもらおう。

中華系移民の歴史は非常に辛く切ないものである。現地の環境に適応するため移民当初は苦労が絶えないが、ましてや異なる肌の色の違いで差別を受けたのなら、移民した月日が如何に長くなっても、財産をどれだけ作っても、心の中に刺さったトゲの痛みはなくならない。

近頃、新型コロナウイルスの感染が益々深刻になり、全世界の感染者数は四百万人を突破した（四月末）。医療スタッフが第一線で命を賭け、人々がその失われた命を心から悼む中、少なからぬ心温まるストーリーが聞こえてくる。しかし、感染症が拡大し始めた頃に欧米社会では、マスクをするアジア系の人が異様な目で見られた。様々な誤解に起因し、アジア系に対する差別の溝がより深くなっているようだ。

カナダは移民の国であり、先住民を除いて、皆、異なった時期に新天地での生活に憧れてやって来たのである。ここではアメリカのような人種のサラダボウルの中でカルチャーショックを受けることはなく、多元的な文化がカラフルなモザイクパズルのように互いにしっかりと繋がっていて、個々の持つ元来の文化の特色を維持し続けている。

息子の小・中学校から大学までの環境を見ていると、住んでいる所には華僑系の人が多いが、クラスの中の人種の配分は平均的だった。息子は小さい頃に移民してきたからかもしれないが、学校では韓国系やユーゴスラビア系、或いはイラン系のクラスメートとも普通に英語でコミュニケーションをとる。学校側は逆に、子供たちには母国語を継承するよう奨励している。祖国の背景を身につけていることが、将来の就学や就職で有利に働く場合があるかもしれないからだ。

しかし、大人の世界では、人種差別は

目には見えないが、感じることはできる。就職先を探す時がよい例だ。移民は同じ民族が寄り集まって住む習慣があり、社会の主流の人が中心になった会社で仕事をするには、大変な努力をして自己アピールする必要がある。人種差別に至らないようにするには、相手が自分の肌の色を見た時、同時に自分の内的素養も見てもらうようにすることが重要だと私は気が付いた。

私は正式に就職先を探す前から既に慈済ボランティアとして活動していた。フルタイムで活動していたため、履歴書を出した時はパートタイムの仕事を選んだ。面接官との受け答えの中で興味ありげに尋ねられたことは、フルタイムのチャンスもあるのに、なぜパートタイムを選んだのか、そして他の時間は何をするのかということだった。私が、大部分の時間をボランティア活動に投入していると答えると、面接官は顔を上げて私を見た。彼らの印象では、アジア系住民でボランティアをする人は稀だったのである。

やっとその就職のチャンスを手に入れた。私の職場では異なる民族への尊重を強調しており、皆、用心して敏感になる言葉を使わないようにしていたが、最初の頃、言語の隔たりと、そこで生まれ育っていないために、現地の文化背景を理解していなかったことで、笑いを

誘うこともあった。その後真面目に仕事をし、心をこめて同僚と付き合って、「道のりが遠ければ馬の実力を知る」、「月日が経てば人の心が分かる」という諺のように、真価が次第に現れ、異邦人としてではなく、皆の良い同僚であり、友人となれたのである。

チャンスを作って、互いに理解し合う

人種差別に至らないようにするために

●張素雯（右）は1997年にカナダのオンタリオ州に移民した。ボランティア活動に参加することが社会に溶け込む方法の1つだった。ノーストロントの慈済人文学校の卒業式・終了式で、当時校長だった彼女は、卒業生の角帽タッセルを左へ動かした。（撮影・丘啓源）

最も重要なのは、主流社会の考え方を理解し、同時に東洋的な考え方も相手に理解してもらうことである。私の経験で言

●クリスマスの雰囲気に満ちたヨーク地方政府の長期ケア部門のオフィスにて。張素雯さんはこの人種が融合した環境の中で働いていることに幸福を感じている。（写真提供・張素雯）

えば、主流社会に溶け込む一番良い方法は、ボランティア活動をすることだ。

私は二十数年前にカナダに移民した。ボランティア活動をするのは、欧米諸国ではごく普通の国民的素養である。高校生は全て何かしらボランティアをしないと卒業できない。息子が小学校に入学した時、私も学校でボランティアとなった。教室での読書の指導、図書館でコンピューターの使用方法の指導、或いは年始に先生を手伝って中国の新年パレードを主催したりするなど、あらゆることに精一杯参与した。その都度私の奉仕は先生や保護者、子供たちの目に止まり、異なる文化というカルシャーショックがもたらす趣きを分かち合うこともできた。

慈済は長期にわたって、ヨーク地方ニューマーケット地区のホームレス支援専用車と協力し合っている。私はそのボランティアの責任者なので、いつもアジア系以外の人たちと接している。その支援センターの責任者はカナダ人だが、機会がある毎に私は慈済の竹筒貯金の精神と静思語を分かち合い、至る所に台湾の愛が存在することを彼らに知ってもらうために、慈済の歳末祝福会にも招いている。

また同じように私たちも彼らのニーズを尊重し、配付活動の準備の時、できる限りホームレスたちの飲食や生活習慣に

合わせるようにしている。ホームレスも様々な人種が集まっているので、季節によって異なる物資を提供している。互いに尊重し理解し合えたならば、例え肌の色が違っても、私たちは心を通わせることができる。

慈済ノーストロント支部のボランティアが現地に奉仕していることは誰の目にも明らかだ。コミュニティで菜食を広めたり、公民宣誓式の際に場所を提供するなど、時を選ばず対応している。また、主流社会の活動にも必ず慈済人の善行する姿が見られる。

感染症拡大が深刻になる中で、慈済は辛うじて八箱の防護服を輸入し、直ちに地元の感染確定患者を受け入れているマッケンジー病院とベサニー（Bethany）シニア長期ケアセンターに届けた。カナダでは、新型コロナウイルスで亡くなった人の半数近くは、老人ホームの入居者である。取次ぎ担当の市会議員から、キリスト教のシニア長期ケアセンターへの物質の支援も構わないかと聞かれた時、私たちは即座に、慈済は宗教と民族の差別をしないと答えた。そこには助け合う民族の姿があり、差別はなかった。

證厳法師は海外へ移住した弟子たちに喚起を促したことがある。人の国で生活するなら、その地で得たものはその地に返すべきだと。私たちは誤解から生じる

人種差別をなくすことはできないかもしれないが、一歩前に踏み出して、善に解釈し、奉仕で以て人種差別をなくすことはできる。

今回の新型コロナウイルス感染症が私たちに教えているのは、ウイルスに国境はないが、愛の心は如何なる遠い所にも届く、即ち民族には隔たりがない、ということである。（慈済月刊六四三期より）

●カナダの医療スタッフには感染予防物資が不足していた。慈済ノーストロント支部は様々な方法を考え、地元で募金を集めて防護服を輸入し、4月25日にマッケンジー病院に届けた。（撮影・梁延康）

歩く時は軽く 地を痛めないように

物事は専念して行いなさい。歩く時に足の裏に神経を集中させ、軽く着実に正しい方向に向けて歩みを進めるように。

◎文・釋徳仉／訳・済運

しっかりと地に足をつければ、よろめかない

「歩く時は軽く、地面を痛めないように」。軽く歩いても足をしっかり地につける必要があり、正しい方向に向かわなければなりません。少しもそれないようにするには精神を集中させ、心して行うことです。

今月の二十八日、上人は教育志策会㊟の席で主任たちの心した授業と優秀な人材養成の取り組みに感謝すると共に、慈済を創設して以来、いつも優秀な専門の人材が志業の運営を担い、自分は安心して任せることができたことをとても幸福に感じている、と述べました。

「若い時から私は一旦決心したことは恐れず行動し、苦労も厭わず、困難を恐れずに克服してきました。これが私の人生観であり、足をしっかり地につけ、一歩ずつ着実に歩んできました。『歩く時は軽く、地面を痛めないように』という感覚は、私の人生での体得と実践から来たものです。若い時から今日に至るまで、朝起きして歩き出す時はいつも足の裏に神経を集中させます。足を軽く下ろしてもよろめかないようにしなければならないからです。今は歳を重ねてよろめく時がありますが、それでもしっかりと大股で歩くように努めています。皆さんから見て私の歩調はゆっくりしていると思いますが、

㊟：慈済の「教育志業策画推動委員会（教育志業計画実行委員会議）」の略

私は足の裏全体でしっかり地面を踏みしめてからもう片方の歩を進めているのです。これが私の歩く方法で、物事を成す時も同じです。成そうとするなら、私は専念して成し遂げます」。

上人はこう言いました、「誠意で臨めば、人を動かします」。慈済人は内に「誠、正、信、実」を修めますが、「誠」が第一です。何事をするにも正当且つ現実的でなければなりません。私はあらゆる慈済人と志業体の主任や職員たちを信頼しており、「人の本性は善です。こちらが最高の誠意で以て人に接すれば、相手も誠意で以て接してくれます。あなたたち一人ひとりを完全に信頼しているのです」。

晨語の時間の『法華経』の講釈は、既に第二十一品「如來神力品」まで進んでいます。上人は神通力を語るのは好きではなく、皆にも神憑り的な奇怪な出来事について語らないよう教えています。現実的に人生に立ち向かい、無いものを有るように話すのはいけません。「如來神力品」と言えば、新型コロナウイルスの感染拡大で常時、世

➡江淑慎先生は慈済大学付属中学校に15年間勤務し、彼女の教師としての情熱と、師であると同時に友人でもあるその姿は、人々の心に深く刻まれています。そして、人生の最期になっても医学に献身しました。（提供・慈済大学付属中学校）

界の慈済人とネットの映像を通じて話していますが、それは現代科学の神通力だと思います。短時間に地球を一周して、異なった国の慈済人と会話し、思っていることを伝えられるのです。

上人はこう言いました。『法華経』は本意であり、菩薩法を教えている、と仏は言っています。慈済人は弛まず菩薩道で努力しています。自らを大切にして、時間は待ってくれないため、生命は時間と共に消えていくことを知るべきです。そして、人生は無常であるため、今この時を逃さず精進することだけが、人生を広く深いものにすることができるのです」。

慈済大学付属中学校の江淑慎（ジアン・シューシェン）先生は、二年ほど前に癌に罹って退職し、今年五月二十二日に亡くなりました。彼女の教え子たちは、先生がこの世を去ったことを知ってとても悲しみ、自主的に追悼会を計画しました。感染症のため、中学校内の三カ所の会場に別れて行われ、恩師に感謝の意を表しました。

「江先生が病気してから、私は彼女に、時間を無駄にせず、最期までやり通すよう励ましました。それを彼女はやり遂げ、皆の模範となりました。私も最期に話ができなくなるまで『法華経』を講釈できるよう自分自身を励ましています。私たちは時間を浪費せず、生命の価値を上げることが大切です。さもなければ、この人生を無駄に過ごすことになります。そして、両親から授かったこの体を使ってこの世を利することをしてこそ、両親に顔向けができ、それが両親の功徳となるため、最高の親孝行になるのです」。

それぞれの慈済の学校はもう直ぐ卒業式を迎えますが、皆、上人を招待しています。たとえ上人自身が参加してもしなくても、常住師匠は必ず参加します、と上人は言いました。常住師匠たちが静思法脈を受け継ぎ、各志業体の責任者が慈済宗門を正しく広めて、人々が正しい精神を持って慈済の四大志業を理解し、この門をくぐるよう導きます。（慈済月刊六四四期より）

訳・済運

八月の出来事……

08・01	慈済基金会は2020年の「7月吉祥月」シリーズ活動を、「誠正信実が心の大地、慈悲喜捨が人生のそよ風」と題し、今日から各地で催しを始めた。「コンミュニティに愛を広める祈福会」や『地蔵経』のオンライン勉強会などが開かれる。また、新型コロナウイルス（COVID-19）の感染が世界に拡大する中、慈済環境保全30周年を記念して、「菜食で完璧な家庭デー」、「環境保全チャレンジ30」などの活動を催すことで、広く菜食と斎戒を呼びかける。
08・03	慈済基金会防疫調整指揮センターはグローバル「防疫2・0」プロジェクトを発動した。秋から冬にかけてコロナ禍の変化と各国のニーズに対応して、アメリカ、マレーシア、インドネシア、南アフリカな

どで医療用マスク、防護フェースシールド、防護服、手袋など４項目の防疫物資を備蓄すると共に、各地で手作りマスクの作成の呼びかけを奨励する。本日、熊士民副執行長は宗教処のチームを伴って、證厳法師にプロジェクトの内容を説明した。同意を得た後、５日に指揮センターの会議で報告する。

０８・０５

インドは６月半ばから雨季に入り、連日の豪雨により北東部で洪水が発生した。慈済基金会はインド霊医会と共同で、８月５日から９月２０日まで被害の大きいアッサム省、ケララ省で被災者に配付を行う。慈済が経費を出し、霊医会が物資を購入をする。

０８・０７

◎慈済基金会はバングラデッシュでの新型コロナウイルス感染予防として、４８００個のマスクと２１６０個の防護フェースシールド、１００個の医療用ゴーグルを提供し、本日、輸入通関が完了した。

◎花蓮慈済病院はイスラム教徒に優しい環境づくりに取組み、院内にイスラム教徒の礼拝室と洗面所をそれぞれ2カ所設けると同時に、コーランと礼拝用マットも用意した。中国イスラム教協会から「清真で優しい環境認定証」を授かり、本日、除幕式が行われた。

０８・０８

慈済タイ支部は４月下旬から展開してきた新型コロナウイルス感染症貧困救済プロジェクトで、チェンマイ県ファン郡に続き、ラチャブリ県ポタラム郡、バンコク及び近郊など１０余りの県や地区、生活困窮世帯を支援して５万６千人分の日用品を配付した。８日と９日にバンコクの静思堂で２回にわたって感謝会が催され、支援してくれた各地の行政長官や民衆に謝意を述べた。

０８・０９

慈済基金会はナショナル・ジオグラフィックが催す「２０２０NAT GEO RUN――世界地球デー５０週年」マラソン大会に呼応して、本日、約４００

	人のボランティアが会場で感染予防の支援の他、ドリンクやオニギリなどを用意すると共にエコ食器を提供し、選手たちにプラスチックを使用せず、生態系を護る等のグリーンアクション理念を宣伝した。
08・13	慈済医療財団法人は嘉義市西区安泰ビルに嘉義慈済診療所を開設した。大林慈済病院腎臓内科の蔡任弼主任医師が責任者となり、内科、外科、小児科、産婦人科、臨床心理科など15の科が設けられ、6月15日からプレオープンを行い、本日、正式な運営が始まった。
08・18	嘉義の大林慈済病院は中正大学と共同で、AI画像認識技術によるマスク着用識別システムを開発した。病院に入る人がマスクをつけていない場合はアラームが鳴るようになっている。人による識別の仕事を減らすと共に院内感染のリスクを下げることができる。
08・19	慈済大学と慈済科技大学はインドネシア大学と学術協力に関する覚書を交わした。学生の交換留学や短期講座への参加、共同学位、共同研究プロジェクト等の交流が行われるようになる。慈済大学とインドネシア大学の合作は2度目だが、慈済科技大学は初めてである。
08・22	◎慈済基金会はアメリカのゴリラ基金会と覚書を交わして放映権を取得し、手話をするゴリラ・ココ（koko）の映像を環境保全活動に使用することができることになった。使用期間は5年である。 ◎慈済基金会環境保全チーム幹事精進研修会が22日から24日に花蓮の静思堂で行われた。慈済の環境保全志業30周年を記念し、23日の午後は「環境保全三十感謝会」が開かれた。世界各地で環境保全ボランティアがオンラインで参加し、證厳法師自らが臨席して、ボランティアたちの心した態度と、愛で以て地球を護り永続的に環境保全に尽くしてくれていることに感謝した。

各国の連絡所

本部
971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL:886-3-8266779/886-3-8059966
志業中心（静思堂）
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL:886-40510777 ＃ 4002
0912-412-600 ＃ 4002

花蓮慈済医学センター
970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL:886-3-8561825
玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL:886-3-8882718
関山慈済病院
956 台東県関山鎮和平路 125-5 号
TEL:886-89-814880
大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL:886-5-2648000
台北慈済病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL:886-2-66289779
台中慈済病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL:886-4-36060666
大林慈済病院
640 雲林県斗六市雲林路2段２４８号
TEL:886-5-5372000

慈済大学
970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL:886-3-8565301

台北支部（新店静思堂）
231 新北市新店區建國路 279 号
TEL:886-2-22187770
慈済人文志業センター
112 台北市立徳路 2 号
大愛テレビ局
TEL:886-2-28989999
静思人文
TEL:886-2-28989888

アメリカ
総支部（San Dimas）
TEL:1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL:1-408-4576969
ハワイ支部（Honolulu）
TEL:1-808-7378885

カナダ
TEL:1-604-2667699

メキシコ Mexicali
TEL:1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo
TEL:1-809-5300972

ブラジル　Sao Paulo
TEL:55-11-55394091

イギリス London
TEL:44-20-88699864

フランス Paris
TEL:33-1-45860312

ドイツ　Hamburg
TEL:49(40)388439

オランダ　Amsterdam
TEL:31-629-577511

スウェーデン　Goteborg
TEL:46-31-227883

オーストリア　Vienna
TEL:43-1-7346988

南アフリカ　Gauteng
TEL:27-11-4503365

中国蘇州
TEL:86-512-80990980

香港
TEL:852-28937166

フィリピン Manila
TEL:63-2-7320001

タイ　Bangkok
TEL:66-2-3281161-3

ベトナム　Hochiminh
TEL:84-8-38535001

ミャンマー Yangon
TEL:95-1-541494

マレーシア
Penang
TEL:604-2281013
Malaka
TEL:606-2810818

シンガポール
TEL:65-65829958

インドネシア　Jakarta
TEL:62-21-5055999
大愛テレビ局
TEL:62-21-50558889

スリランカ　Hambantota
TEL:94(0)472256422

ヨルダン　Amman
TEL:962-6-5817305

トルコ　Istanbul
TEL:90-212-4225802

オーストラリア Sydney
TEL:61-2-98747666

ニュージーランド
Auckland
TEL:64-9-2716976

慈濟

２０２０年９月１６日発行・２８５号
中華郵政台北誌字第９０９號執照登記為雑誌交寄
Printed In Taiwan

発行人　釋證厳
発行所　慈済基金会
〒 112 台湾台北市北投区立徳路 2 号
編　集　慈済日本語翻訳チーム
杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪
電　話　(886)02-2898-9000
FAX　(886)02-2898-9994
E-mail: 021620@tzuchi.org.tw

■

慈済基金会日本支部
〒 169-0072　東京都新宿区大久保 1-2-16
電　話　(03)3203-5651 ～ 5653
FAX　(03)3203-5674
E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw
tzuchi@tzuchi.jp

證厳法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本文への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただければ幸いに存じます。（日文組編集同人）

明日への仰望

ドアさえもない赤貧洗うが如き家に住む男の子トンデライは、待ちきれず、慈済ボランティアが送ってきた福慧ベッド（折り畳み式ベッド）に座った。もうパパと地面に寝る必要はなく、次の食事にもありつけた。

新型コロナウイルスの感染が拡大する中、ジンバブエは行動制限令を発令した。食糧を買い溜めする能力のない貧困者は直ぐに食糧不足に陥った。首都ハラレのテンボエ地区のボランティアは各家庭に白米、食用油、石鹸、マスクを届け、特に極貧世帯にはエコ毛布と折り畳み式ベッドを贈った。

（文、撮影・レンジシール・ジヤーネ　ジンバブエ・ハラレ市　2020.6.11）

慈済日本サイト　慈済ものがたり